長崎県文化財調査報告書　第50集

長崎県埋蔵文化財調査集報III

1980

長崎県教育委員会

長崎県埋蔵文化財調査集報III

序

このたび，長崎県埋蔵文化財調査集報の第III集を公刊することになりました。これは，一つには，昭和52年度に実施した小値賀町殿寺遺跡緊急調査の報告，二つには，昭和47年度から実施した埋蔵文化財調査講習会において教材遺跡となった東彼杵町および大村市所在の古墳群に関する調査報告，および森山町出土の木製の刳舟に関する調査報告であります。

いずれも，調査の面積や日数などの点で，比較的小規模の調査であるため，一冊に集録したものであります。

地下の埋蔵文化財は，私たちが，遠い祖先から受けついだ遺産でありますから，これを損ねないで後世に受けわたすことが現代に生きる私たちに課せられた責務であります。これまでも，またこれからも，この原則で文化財保護行政をすすめる所存であります。ただし，開発事業と文化財保護行政のはざまで，どうしても発掘調査を実施して，遺跡を「記録」として保存することを余儀なくされることも少なくありません。そこに，調査技術の研さんと普及が必要となるわけでありまして，今回収録したような技術講習の場が要求されるわけであります。

開発事業は，規模の大小にかかわらず，遺跡破壊の問題をかかえておりますが，開発サイドと文化財サイドとの連絡と調整によって，不作意の遺跡破壊は回避できる余地が十分ありますし，その実績も多くもっております。

本書が，文化財保護の基本は「連絡と調整」にあることと，そして，調査技術の「研さん」が常に必要であること等の理解に，又，学術研究の資料としても役立つことを願うものであります。

昭和55年３月31日

長崎県教育長　三　村　長　年

例　　言

1　本書は，長崎県教育委員会が行った下記遺跡の調査報告書である。

Ⅰ	殿寺遺跡	小値賀町	昭和52年度調査
Ⅱ	ひさご塚古墳（東彼杵町）・鬼の穴古墳・野田古墳（大村市）		昭和49・50・51年度調査
Ⅲ	唐比塔ノ本遺跡	森山町	昭和49年度調査

2　本書はⅠの殿寺遺跡を正林　護，Ⅱ・Ⅲを藤田和裕が執筆した。

3　本書の編集は，執筆者がその責任において行い，藤田がこれを総括した。

4　その他詳細は，各稿の例言を参照されたい。

総　目　次

序　例言

I　殿寺遺跡　1～46

1　調査にいたる経過 …… 5
2　五島列島と小値賀島 …… 7
3　小値賀町の歴史的環境 …… 8
4　殿寺遺跡の立地と位置 …… 15
5　殿寺遺跡の調査 …… 17
6　小値賀町の主要遺跡 …… 31

II　ひさご塚古墳・鬼の穴古墳・野田古墳　47～64

1　はじめに …… 50
2　立地と環境 …… 52
3　ひさご塚古墳 …… 53
4　鬼の穴古墳 …… 57
5　野田古墳 …… 61

III　唐比塔ノ本遺跡　65～72

1　調査に至る経緯 …… 68
2　立地と環境 …… 69
3　調　査 …… 70
4　おわりに …… 72

I 殿寺（とべら）遺跡

——北松浦郡小値賀町所在——

例　　言

1　本書は，昭和52年度，長崎県北松浦郡小値賀町所在殿寺遺跡について行った緊急発掘調査の報告書である。

2　調査は，長崎県教育委員会と小値賀町教育委員会が共同で，同年4月2日から同月8日まで実施した。

3　調査と，調査結果の整理は正林の担当で実施したが調査結果の整理段階では，安楽　勉・平野敏和・中村和正・中田敦之・村川逸朗・竹内　弘の協力を得た。

4　調査に関して地元の多くの方々に助力願った，芳名は経過の項に記したとおりである。

5　本書の執筆および編集は正林が担当した。

6　町内遺跡については地元教育委員会の塚原　弘氏の教示に負うところが大であり，同氏に感謝する。

図 版 目 次

頁

図版１　遺跡（遠望・近景）……35
図版２　遺跡（調査風景・遺構配置状況）……36
図版３　遺跡（土層・遺構出土状況）……37
図版４　調査（１号石棺・３号甕棺）……38
図版５　遺構（１号石棺・同遺物出土状況）……39
図版６　遺構（１号石棺土坑・墓坑）……40
図版７　遺物（第１号壺棺・第２号甕棺）……41
図版８　遺物（第３号甕棺・１号石棺内土器）……42
図版９　遺物（第４号甕棺・石器）……43
図版10　遺物（第５号甕棺・第６号甕棺）……44
図版11　小値賀町内出土の遺物……46

本文目次

頁

1　調査にいたる経過…… 5
2　五島列島と小値賀島…… 7
3　小値賀町の歴史的環境…… 8
4　殿寺遺跡の立地と位置……15
5　殿寺遺跡の調査……17
6　小値賀町の主要遺跡……31

挿図目次

頁

第1図　小値賀町位置図…… 6
第2図　五島列島の主要遺跡…… 9
第3図　小値賀町および町内遺跡分布図……12
第4図　小値賀東部海岸および殿寺遺跡周辺図……16
第5図　殿寺遺跡土層図……17
第6図　殿寺遺跡遺構配置図……19
第7図　第3号甕棺出土状況実測図……20
第8図　第1号石棺実測図……21
第9図　第1号石棺墓坑実測図……22
第10図　第1号壺棺実測図……23
第11図　第2号甕棺実測図……24
第12図　第3号甕棺実測図……25
第13図　第4号甕棺（表面採集）実測図……26
第14図　第5・6号甕棺（表面採集）実測図……26
第15図　第1号石棺内土器実測図……27
第16図　石器実測図①……29
第17図　石器実測図②……29
第18図　五島灘沿岸の弥生時代主要遺跡……33

表目次

頁

第1表　小値賀町内遺跡一覧表……13

1　調査にいたる経過

殿寺遺跡は，長崎県北松浦郡小値賀町前方郷相津迎ナカストウにある周知の遺跡である。昭和42年，文化財保護委員会（現文化庁）刊の全国遺跡地図長崎県版に収録はないが昭和51年文化庁刊行の同遺跡地図には，８－59として「前方相津殿寺遺跡」散布地，同町前方郷相津大阪所在となっている。遺跡名称は全国遺跡地図所収のものを用いるのが正当であるが，遺跡名称として，やや長い感じがあり，他に混同のおそれある遺跡名はなく，呼び方も訛による独特のものがあるので，本書では「殿寺」遺跡の名称を用いることにする。

昭和52年３月27日，土地所有者加山福満氏が，同町前方郷相津3844－１の畑地において石垣の積みかえ工事を実施され，当該工事に支障のある梅の樹移動のため，掘りおこしの作業が実施された。その折に，「梅の木をぬきおこした際に，根がすっぽり，泥焼きのカメの中にはまった状態で」第１号カメ棺が発見され，隣の梅を掘りおこしたところ，「同じ状態があった」由である。更に，旧石垣をとりこわしたところ，板石が現れて，「たたくと空洞の音がした」由で，直ちに小値賀町教育委員会に急報された。同報は，翌３月28日，長崎県文化課に伝えられ，４月２日～同月８日までの７日間，緊急に発掘調査が実施されることになった。調査は，同町と県が主体となって実施したが，工事を中断して，調査期間の確保に協力いただいた土地所有加山福満氏に感謝申上げるとともに，終始，主体的に調査を進められた小値賀町教育委員会の方々と，測量の面で御協力願った町土木課の方々には，芳名を記して謝意を表する。

調査関係者　（敬称略・順不同）

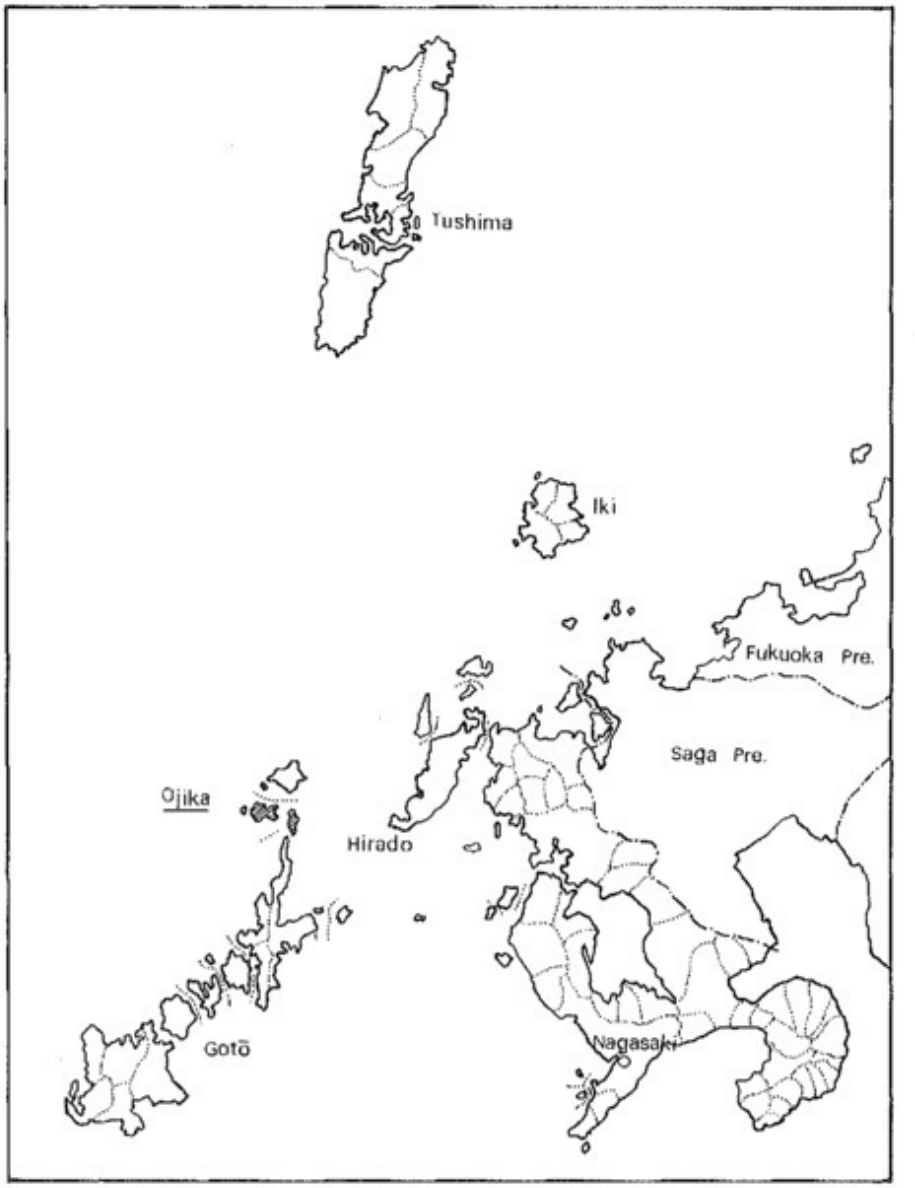
加山　福満　　小値賀町前方郷　土地所有者

田中兵太郎　　小値賀町教育長
江口　弘志　　小値賀町社会教育主事
塚原　　博　　小値賀町教育委員会主事
筒井　英敏　　小値賀町社会体育主事
中村　敏章　　小値賀町土木課技師
升永　裕司　　小値賀町土木課技師

瀬尾　泰平　　神浦中学校教頭

太田　弘道　　福善寺住職

なお，福善寺住職，太田弘道氏御夫妻には調査期間中，大変にお世話になり，紙上をかり，謝意を表する。



第1図　小値賀町位置図

2　五島列島と小値賀島

——小値賀町地誌略——

五島列島は長崎県本土部の西方海上にうかぶ島々であり，列島最南端の福江島と長崎間は，ほぼ90km，約4時間の距離，上五島の中通島と佐世保との間もほぼ同様である。五島列島は南西方向から，北東の方向約90kmにわたって連なり，南から順に福江島・久賀島・奈留島・若松島・中通島・小値賀島・宇久島となるが，行政上は中通島以南の諸島は南松浦郡，宇久・小値賀の二島は北松浦郡に属している。したがって，正しくは「七島」列島であり，便宜上，上五島と呼ぶ場合，中通島以北の3島を指す。

全七島は，多くの断層によって分かれ，沈降によって生じた島嶼群からなる地塁山地である。したがって，海岸線は長大で複雑なリアス式海岸を形成し景勝の地が多い。また，島嶼群の傾斜率が高く，標高に比してけわしい山容をもつ所が多い。

五島列島は，「五島火山岩類」が島々を貫き，南端福江島の鬼岳火山群はその典型である。

小値賀島は東西約5km，南北約3kmの本島と多くの分島からなる狭隘な島であるが，本城岳（111m）・番岳（104m）・愛宕山（87m）等多くの火山体の集合から成っている。火山体の裾野の低地は，町のほぼ中央にある「中村」・「船瀬」を結ぶ，より低平な部分に当り，かつては「瀬戸」の状況となって，小値賀本島が東西に分れていた部分である。この「瀬戸」は，1334年（建武元年）平戸松浦家15代の祖，定によって「南岸を堺築」して「蒔爾たる二島」を現在の小値賀一島とした部分である。このような地形と歴史の中で，島内は道路が発達している。海岸部は本島北岸や付属島とともに海食崖が発達し，現地で「ダキ」とよぶ摺鉢状の地形が見られる。小値賀本島の東方海上には，本島と同じぐらいの面積をもつ野崎島があるがほぼ中央の鞍部以外は急峻な傾斜で海没しており，鞍部以外に人文界は存しない。

五島列島に於ては，前述のごとく傾斜率の高い山容，火山灰質の土壌，河川の未発達という地貌と景観が人文界をも強く規制している。水田可耕面積狭少で収量低く，階段状の畠地は，甘藷・麦などが主要作物になっている。小値賀島は列島中で最下位に近い面積の島であるが，全五島列島の中で人文度は高い方に属している。即ち，低平な島の地形は，農用地35.7%と高く，保肥力も高い。天然林22%という数字は島の景観保全にも重要な要素となっている。

一方，五島各島に共通した海底岩礁と海岸地形は漁業の伝統を強く残しているが，対馬暖流の域内にあるため，西海捕鯨の伝統をうけついでいた。近海漁業は現在も盛んである。

〈参考文献〉

1　小値賀町郷土誌　小値賀町教育委員会　昭和53年

2　富江町郷土誌　富江町教育委員会　昭和52年
3　郷土の観察と地図の読み方―長崎県版―　石井泰義編　昭和39年
4　全国遺跡地図　長崎県　文化財保護委員会　昭和42年
5　同上　文化庁　昭和51年
6　長崎県遺跡地名表　長崎県文化財調査報告書第1集　長崎県教育委員会　昭和37年
7　長崎県農林統計調査　昭和50年
8　九州考古学論攷　鏡山　猛　鏡山猛先生還暦記念論文集刊行会　昭和47年

3　小値賀町の歴史的環境

九州本島の西北部海上にうかぶ五島列島と九州本島との交渉が始まったのは，旧石器時代以来，連綿として，同じ圏内で行われてきたと考えられる。

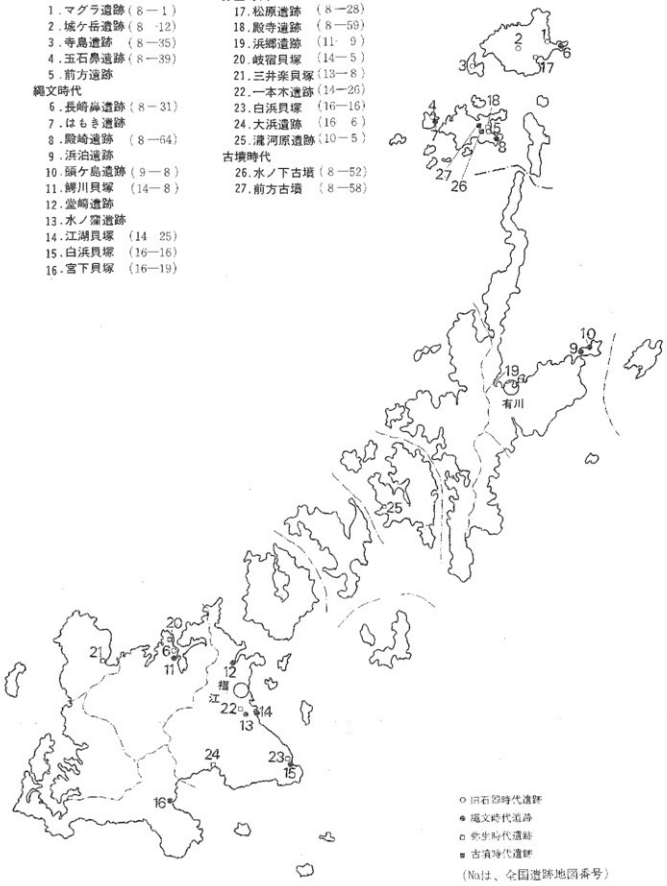
五島列島の名が，文献記録の上であらわれてきたのは，古事記上巻における国生み神話の中の「知許(ちか)島」とされ，「肥前風土記」の値賀島条の記事もある。後者には，現在の長崎県の県北平戸島にまつわる地名島名がしるされており，志式(ししき)島（平戸市南部の志志伎(ししき)町？）西方海上の海産豊かな「小近(おちか)」・「大近(おおちか)」があって大小の属島を持つことの記録がある。小近，大近なる五島列島の古称が知られる。「ちか」の呼び方は，文字通り本報遺跡のある小値賀島の名称といえよう。

考古学上の事象に関していえば，細石刃文化を含めて，九州本島と常に同じ圏内にあったと考えられ，近年，旧石器時代遺物がやや顕著になってきている。縄文時代においてもほぼ九州本島と同じ傾向にある。弥生時代の五島列島においては，水田可耕条件不備な自然条件のなかで，縄文時代の遺制の強い影響をうけながらも中期末までは，九州北部と同じ枠の中にあったことが知られるが，同後期の頃から古墳時代にかけては，上・下五島の間で異相を呈してきている。

五島列島の旧石器時代遺物については，小値賀島の北東隣の宇久島（町）の城ケ岳遺跡（全国遺跡地図　長崎8－12）における多数の細石刃および細石刃核が地元の研究家瀬尾泰平氏によって採集整理されており，つとに著名であるが，その後の調査で，ナイフ形についても宇久町マグラ遺跡（同前地図8－1）や小値賀町玉石鼻遺跡（同前地図8－39）等が知られるようになった。また，従前，あまり旧石器時代遺物の知見のなかった下五島においても福江島茶園遺跡の細石刃核（南松浦郡岐宿(しきゅく)町所在　同前地図14－7）の発見がある。

旧石器時代
1.マグラ遺跡（8－1）
2.城ケ岳遺跡（8 -12）
3.寺島遺跡 （8—35）
4.玉石鼻遺跡（8—39）
5.前方遺跡
縄文時代
6.長崎鼻遺跡（8－31）
7.はもき遺跡
8.殿崎遺跡 （8—64）
9.浜泊遺跡
10.鍋ケ島遺跡（9—8）
11.鰐川貝塚 （14—8）
12.堂崎遺跡
13.水ノ窪遺跡
14.江湖貝塚 （14 25）
15.白浜貝塚 （16—16）
16.宮下貝塚 （16—19）

弥生時代
17.松原遺跡 （8—28）
18.殿寺遺跡 （8—59）
19.浜郷遺跡 （11 9）
20.岐宿貝塚 （14—5）
21.三井楽貝塚（13—8）
22.一本木遺跡（14—26）
23.白浜貝塚 （16—16）
24.大浜遺跡 （16 6）
25.滝河原遺跡（10—5）
古墳時代
26.水ノ下古墳（8—52）
27.前方古墳 （8—58）

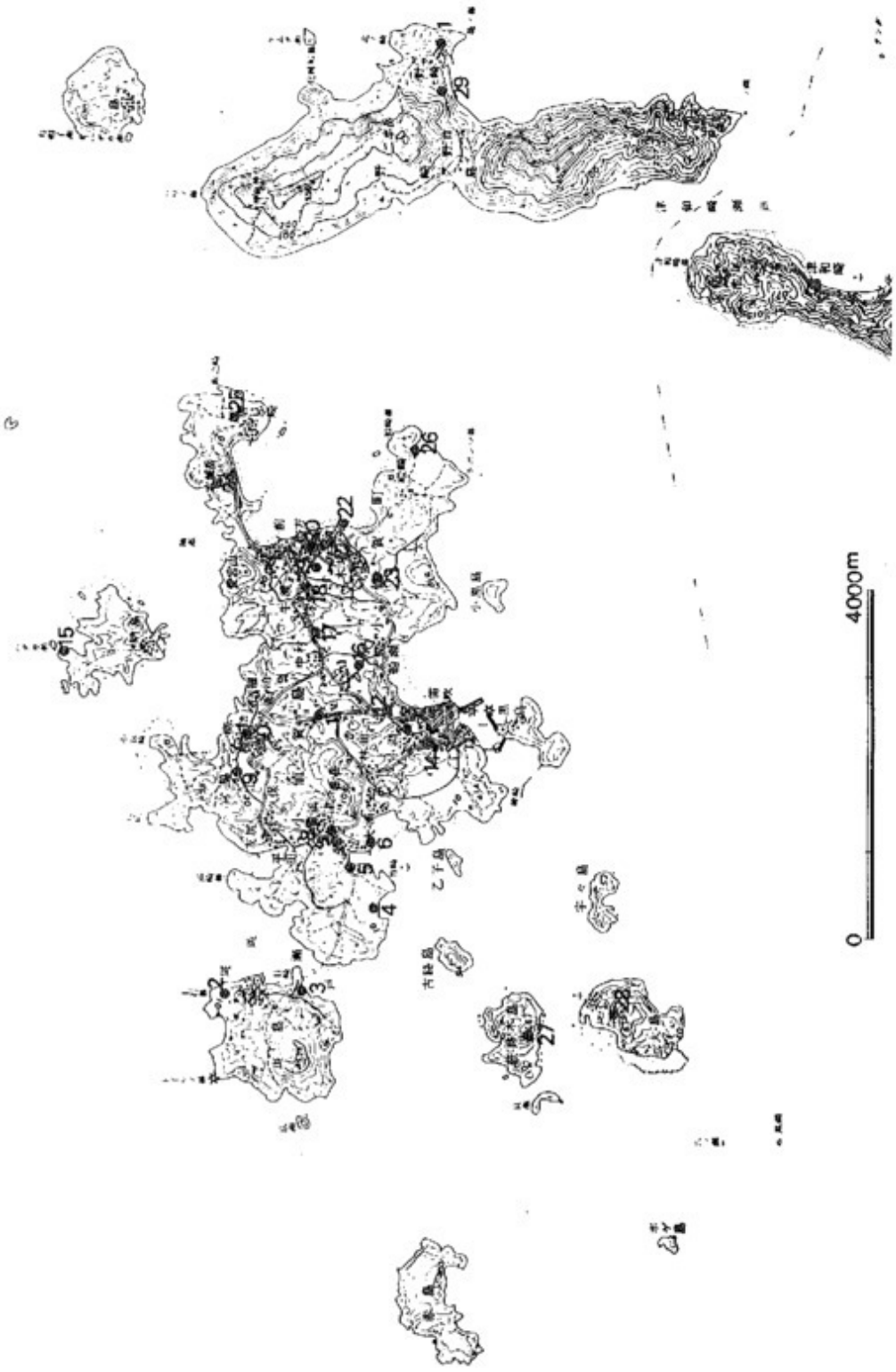


第2図 五島列島の主要遺跡

縄文時代の五島列島についての系統的研究は，弥生時代に関する研究に比してやや遅れたが宇久島長崎鼻遺跡（中期　昭和44年），江湖貝塚（前期　昭和44年），宮下貝塚（後期　昭和40年），水の窪遺跡（晩期　昭和51年），白浜貝塚（後・晩期　昭和54年）等の調査によって，五島列島における縄文時代の様相が，五島列島の自然に裏うちされた，きわめて海洋性の強い文化として明らかになってきている。特に，水ノ窪遺跡，白浜貝塚における縄文時代晩期後半の遺跡の調査は，従前の五島列島において空白状態であった弥生文化受容前夜の様相を知るうえに重要な手がかりを与えるものであった。また，小値賀町のはもき遺跡における押型文土器（本報　小値賀町の主要遺跡の項参照）の発見は，縄文時代早期の五島列島研究にとってその一歩をしるしたものといえよう。

五島列島における弥生文化については，第２次大戦前からの研究があるが，昭和37・38両年度における寄神貝塚（岐宿町　全国遺跡地図14－５）・大浜遺跡（福江市　同前図16－６）・三井楽貝塚（三井楽町　同前図13－８）の発掘調査及び全五島の分布調査は画期的なものであった。一方，引続いて行われた松原遺跡（宇久町　同前図８－28）・浜郷遺跡（有川町　同前図11－９）の調査は，考古学・人類学の面から五島列島における弥生時代墓制と人類形質にせまるもので，人類形質の面で縄文人的形質の遺存が指摘され，宇久松原遺跡における弥生墳墓に支石墓の形態が認められ，浜郷遺跡における片刃方柱状石器の副葬例や，イモ貝製貝輪の副葬など，対馬海流流域にあらわれる五島列島の位置を再確認させる発見であった。五島列島の弥生時代遺跡は，以上のごとく注目すべき事象を伴って中期まで推移しているが，後期以降の様相は，上・下五島間では著しい相異を見せてくる。弥生時代後期遺跡は，五島列島中で，南端の福江島の一本木遺跡（同前図14－26）および，大浜遺跡の一部遺構に見られるのみで，他の諸島には見ることができない。弥生時代後期の上五島地区における「空白」がなにを意味するものか，興深いところである。常に五島列島に強い文化的影響を及ぼしてきた北部九州からの「影響力の激減」の背景に，倭人伝の記事「倭国大乱」が考えられないであろうか。

五島列島における古墳時代に関しては，弥生時代後期と同様に，遺跡・遺物はその分布状況が稀薄である。殊に下五島の島嶼においては遺物においてすら発見例が少なく，わずかに福江市江湖貝塚に近い畑地において偶然の機に発見された須恵器片の発見が１点見られているにすぎない。このような状況は，従前の分布調査に遺漏があるのか，弥生時代後期以降，急激に遺跡遺物が減少する社会情勢が介在したかのいずれかであろう。このような古墳時代遺跡の現況のなかで，ひとり上五島小値賀島（町）のみは神方古墳（同前図８－58）・水ノ下古墳（同前図８－52）等の古墳が小規模ながら造営されており，五島列島のなかで特異な姿を示している。このことは，小値賀島が，下五島の諸島に比してなんらかの優位を占める条件を有していた結果を示唆している。このことは，ひとり五島列島のみの情勢ではなく，九州そのものが，任那の南鮮支配や５世紀における中国南朝への遣使に象徴されるような日中・日朝関係の進展のなかで，従前にもまして重要な位置を占めるに至った，そのような内外情勢を反映したものであ



第３図　　小値賀町および町内遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	性格	備考
1	野崎遺跡	北松浦郡小値賀町野崎郷	散布地	黒燿石剥片
2	玉石鼻遺跡	〃　〃　斑島郷玉名鼻	〃	ナイフ形石器
3	はもき遺跡	〃　〃　〃	〃	山形押型文土器
4	浜津折尾遺跡	〃　〃　浜津郷折尾	〃	黒燿石剥片
5	浜津矢瓮遺跡	〃　〃　〃　矢瓮	〃	〃
6	浜津前目遺跡	〃　〃　〃　前目	〃	〃
7	浜津古墳	〃　〃　〃	円墳	
8	友尻遺跡	〃　〃　友尻	貝塚	滑石製石鍋
9	宮脇遺跡	〃　〃　柳郷宮脇	散布地	黒燿石剥片
10	柳郷遺跡	〃　〃　柳郷宮脇	円墳	
11	小値賀中学校遺跡	〃　〃　笛吹郷	散布地	黒燿石剥片
12	笛吹水ノ下古墳	〃　〃　〃　水ノ下	円墳	
13	笛吹遺跡	〃　〃　〃	散布地	黒燿石剥片
14	笛吹郷古墳	〃　〃　〃	円墳	
15	元冠碇石	〃　〃　納島郷ハダカ瀬	防塁跡	
16	船津遺跡	〃　〃　笛吹郷	散布地	黒燿石剥片
17	椿山古墳	〃　〃　中村郷椿山	円墳	
18	友尻遺跡	〃　〃　前方郷友尻	散布地	黒燿石剥片
19	前方古墳	〃　〃　〃	円墳	
20	**殿寺遺跡**	〃　〃　〃　相津	**墓地**	**甕棺・石棺**
21	神島神社遺跡	〃　〃　〃　〃	散布地	土器片・黒燿石剥片
22	元冠碇石	〃　〃　〃　(港底)		
23	木場遺跡	〃　〃　〃　木場	散布地	七器片
24	本城岳遺跡	〃　〃　本城岳	城跡？	
25	唐見崎遺跡	〃　〃　唐見崎	散布地	黒燿石剥片
26	殿寺舟越遺跡	〃　〃　野崎郷	〃	縄文式(後期)土器・石器
27	藪路木遺跡	〃　〃　藪路木島郷	〃	黒燿石剥片
28	大島ダイラ遺跡	〃　〃　〃	〃	〃
29	野崎海岸遺跡	〃　〃　野崎郷	〃	〃

第1表　小値賀町内遺跡一覧表

ろうことを示唆している。五島列島は，大陸や朝鮮半島と我国の関係が緊密化する場合，壱岐・対馬とともに常に接点の位置にあり，口碑伝承も多く残されている。そこには，上五島の島々が下五島よりも平戸島をも含めた北松浦郡や北九州に近いという条件があったことも事実であろう。因みに，上五島と平戸島間の海上距離は30km，晴天時には容易に相互の島影を望見し得る距離にある。肥前風土記には値賀島のとぶひの記事があるのも，小値賀島を含めた上五島が，外部に対する位置故に重要視されたことを物語るものであろう。小値賀島の東海上に属島の野崎島があり，峻険な山頂に神島神社があり，狛剣（環頭太刀）が蔵されていたことも，小値賀島の位置が重要視されていたことの投影とみることができよう。

〈本稿関係文献〉

1　南松浦郡出土遺物並びに地名報告　桑山龍進　長崎談叢18　昭和10年

2　我長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡遺物の概略に就て　津田繁二　長崎談叢26　昭和15年

3　小値賀町郷土誌　小値賀町教育委員会　昭和53年

4　江湖貝塚　坂田邦洋　昭和48年

5　宮下貝塚　図録篇　賀川光夫　長崎県文化財調査報告第7集　長崎県教育委員会　昭和43年

6　同5．解説篇　賀川光夫　長崎県文化財調査報告第9集　長崎県教育委員会　昭和46年

7　五島遺跡調査報告　鏡山　猛他　長崎県文化財調査報告第2集　長崎県教育委員会　昭和39年

8　水ノ迫遺跡　正林　護，高野晋司　福江市文化財調査報告第1集　福江市教育委員会　昭和51年

9　白浜貝塚　正林　護，安楽　勉　福江市文化財調査報告第2集　福江市教育委員会　昭和55年

10　五島列島の弥生文化総説篇　小田富士雄　昭和48年

11　全国遺跡地図　長崎県　文化庁　昭和51年

4　殿寺遺跡の立地と位置

小値賀島は，低平な地形をもち，海上からの景観は，僅かな標高の陸地に，標高100ｍ未満の火山群が，ゆるやかな裾野をもって展開して，優美な変化を見せている。全体に傾斜度の強い五島列島の各島と際立った景観の差を見せる。但し，海岸線には，平面観半円形の海蝕涯（いわゆる「ダキ」）が目立ち；景観とは別に，五島円錐火山群という共通の成立要因をもつことが理解される。

小値賀島本島は，東西５km，のやや東西に長い島であるが，元来東西２島に分かれ，狭隘な瀬戸によって隔てられていたといわれている。島を東西に分けていた旧瀬戸部分は，現在の福泊――中村――船瀬を結んだ延長１km弱の部分である。旧瀬戸のほぼ中央は現在，新田大明神が祠られており，ここの部分が最も広幅で200ｍ弱を計る。平戸松浦家15代の祖，源定による埋立開田が1334年（建武元年）行われた部分とされているが，この部分より東島・西島に分かれていたわけで，本報の殿寺遺跡は，東島の東海岸，前方郷にある。東島の北辺には愛宕岳・本城岳があり，南辺に摩瀬岳および相津岳がある。これら南北２群の爆烈による溶岸台地が接合して低平な前方方面の地形を形成したもので，西島の中心である笛吹の集落とならぶ前方の集落がある。

前方浦に向けて西――→東にはり出した標高10ｍ程前後の３段高地があり，神島神社遺跡（全国遺跡地図長崎８－60），殿寺遺跡（８－59），神方古墳（８－58）がそれぞれ立地している。現地は，標高約12ｍの畑地にある。県道小値賀循環線がほぼ島の東西を貫いているが，島の東辺で，名刹福善寺からやや東南行するあたりで神島神社に至る。遺跡地は，神島神社から，約200ｍ北行した地点にある。

第4図　小値賀町東部海岸および殿寺遺跡周辺図

5　殿寺遺跡の調査

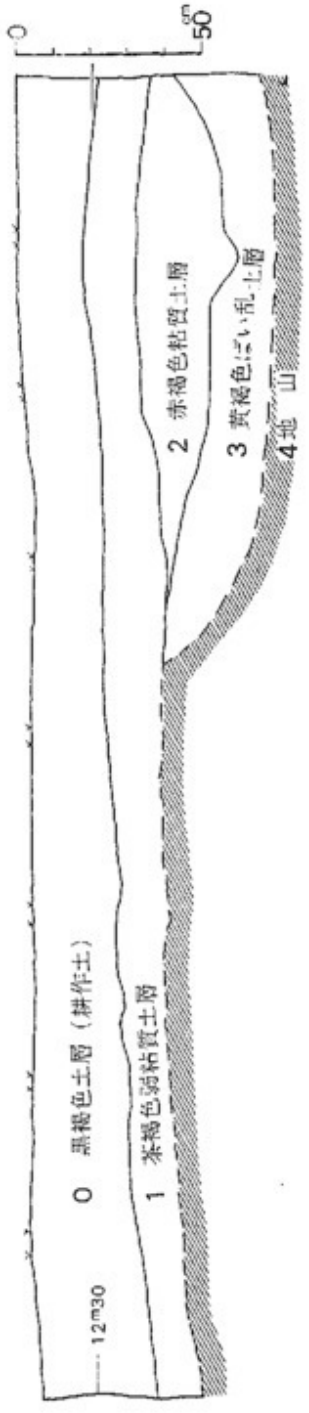
殿寺遺跡の調査は，長崎県北松浦郡小値賀町前方郷相津迎ナカストウの畑地の一部６㎡について昭和52年４月２日～同月８日実施した。現地付近の畑地は，自然の起伏が残っているが，地下げ工事がかつて行われたことがあるといわれ，遺構等の損壊が懸念されたが，調査の結果，一部の損壊はみられたものの，当該の畑地全域に及んでいるか否かは確認する余裕がなかった。

調査は，梅の樹移動によって発見された埋葬遺構部と石垣補修のため石材が除去される部分について実施した。検出遺構は，すでに除去された２遺構を除いて，壺棺墓（第３号）と石棺墓（１号）の２基である。

梅の樹移動の作業によってすでに除去されていた第１号壺棺および第２号甕棺に，石垣の間より採集した，第４・５・６号を加えれば，６基の甕棺と１基の石棺を得たことになる。

(1)　土　層

調査区の南側の土層を記録した。表層（０層）は，黒褐色の耕作土で粘質をおびる。小値賀町の土壌は，本来，凝結火成岩を母材とする強粘質の赤土であり，過湿過干性で保肥性は良好とされているが，過干状態における耕転が困難とされている。このため，腐葉土等を客土することによって，しばしば土壌改良が行われたが，調査地点の耕土も土壌改良が行われている。平均深度20cm程度で黒曜石の剝片，土器片を若干見ることができる。１層は茶褐色の弱粘質土で，礫を含まない。小値賀町本来の土層で遺跡を包含する。第３号壺棺墓と第１号石棺墓の墓壙の切りこみは，この層の上位から，と思われる。遺物を若干包含しているが上半は耕作等による撹乱が一部見られ，新旧の遺物の混在が認められる。第２層は，赤褐色の粘質土で遺物等を含まない。第３層は黄褐色のばい乱層で自然層である。第４層は地山である。



第５図　殿寺遺跡土層図

(2) 遺構の配置と墓域

計4基の墳墓群の配置は第5図のとおりであるが，第1号（壺棺）および第2号（甕棺）は，梅の木移動作業のため詳細は不明であるが，作業者の記憶によれば，梅の樹根が「すっぽり，はまっていた」とのことであり，直立状態であったことが知られる。各埋設の位置は，凹みによって知り得たが，墓壙の状態は確認できなかった。3号壺棺は胴部最大部位以上が失われており，埋設の旧状を復原想定すれば，壺棺の口縁は，現在の耕作土表面と同じレベルになり，地下げ工事によって損壊されたことになる。第1号石棺は，石垣の構築作業によって斜断された状態で検出された。蓋石材も，石垣工事によって，かなり失われていた。

殿寺遺跡の範囲については明らかでないが周辺の地形と遺物散布状態よりすれば，今回の調査地点をほぼ北限として，南手一帯の畑地に展開し，なお相当数の埋葬遺構が包蔵されている可能性が強い。

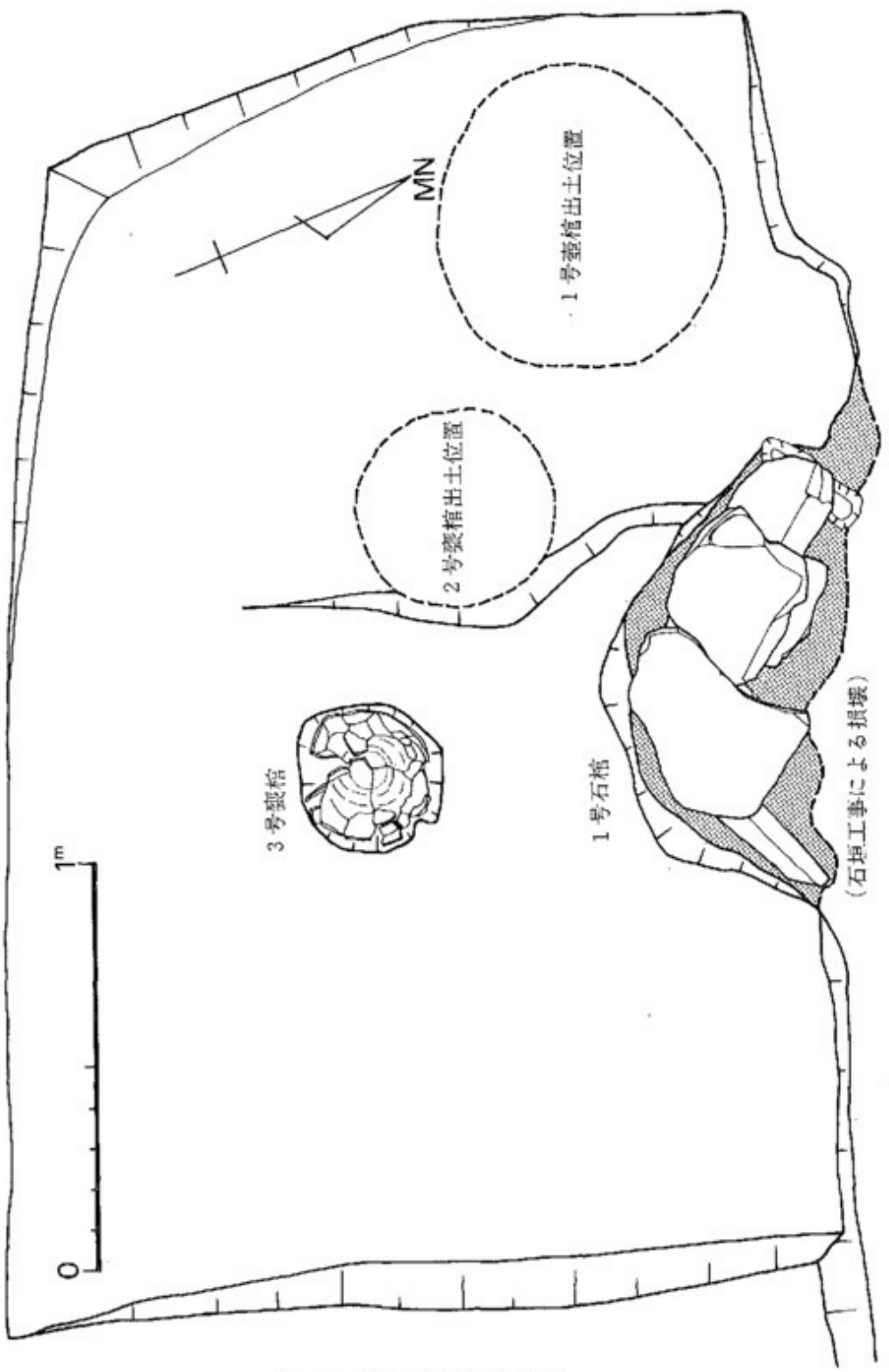
(3) 遺　構

第1号壺棺および第2号甕棺は，梅の樹の除去作業によって除去されていたが，埋設の位置は確認された。墓壙の状況は不明であるが，3号壺棺同様，現在の第1層より切りこまれたことは確実である。1号壺棺は頸部から上を復原想定してみると，器高65cm程度のものであり，わずかに残されていた墓壙底のレベルからすれば，現在の1層表面のレベルから墓壙が切りこまれていたことになり，1層の旧状は現在よりもかなり厚かったことになる。

第2号甕棺は，1号壺棺の東手に近接して埋設されていたといわれ，直立の状態であったといわれる。器高70cmであるが，墓壙底のレベルが1号よりも深いため，口縁部まで完存したと考えられる。

第3号は小型の壺棺墓で，胴部の最大径部付近以上は失われていた。地下げ工事によるものであろう。第7図に示したごとく，直立の状態で埋設されていた。器高50cm程度の旧状であったと考えられるが，頸部以上を欠きとって利用したものとすれば，現在の1層上の表面近いレベルに上面がきていたことになる。現存の墓壙は径35cmほどの浅い漏斗状で，甕の器型にそって掘られている。人骨，副葬品は検出されなかった。

第1号石棺墓は，今次調査の中央部北側において検出され，石垣工事によって斜断された状態であった。長軸は略南南東であるが，北西の石材が失われており，北東の石材また同様に失われていたため方位は正しくは確かでない。石材は，いずれも，玄武岩板状の自然石を用いている。失われた北西の石材は墓壙底に更に掘られた浅い土壙によってその位置を知ることができる。そのことより，石棺の規模を復原すれば，南南東の長軸内法は約75cm，短軸60cm弱と見られ，やや方形に近いものであったと考えられる。その形状はΠのごとくであったらしい。蓋

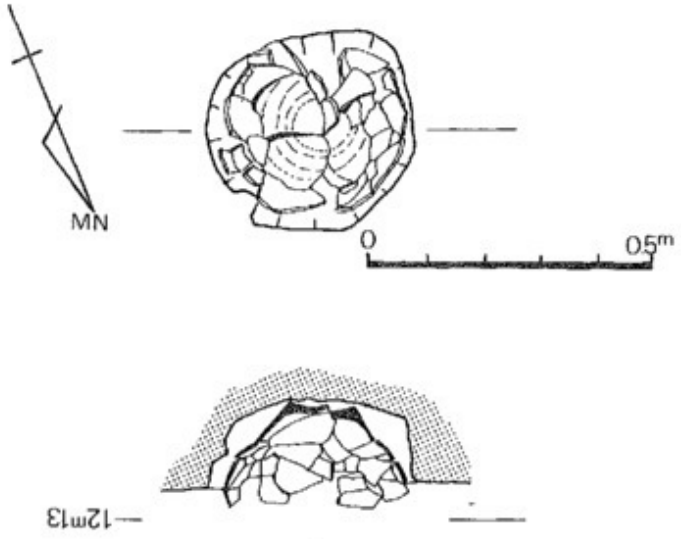


第6図　殿寺遺跡遺構配置図

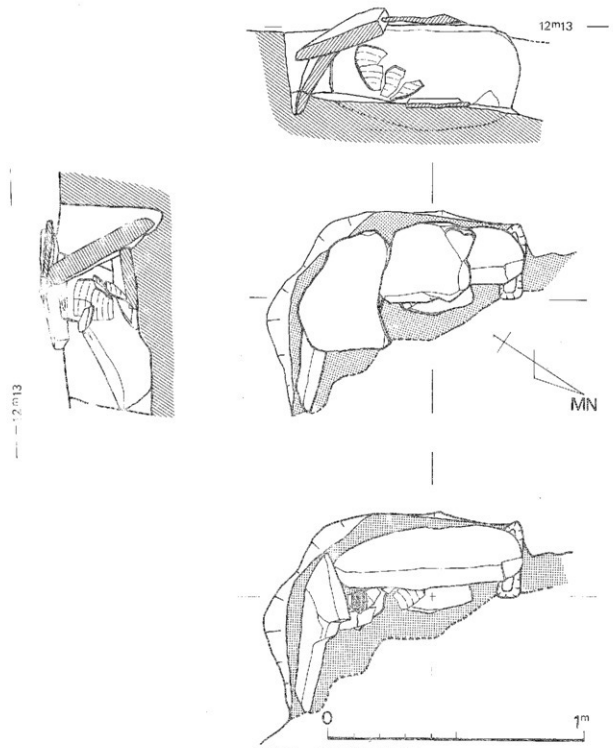
石材は，30cm×40cm，30cm×30cm程度の板石２枚が現存していたが，棺の推定形状よりして短軸の内法寸法にも及ばない規模のものであり，通常の石棺の蓋石の用法をなさなかったと考えられる。旧石垣の材料に，同様規模の石材が多く用いられていたことと併せ考えれば積石墓状に，小型の板石を用いて棺身を被覆していたことが推測され，興味深い。棺床には平滑な板石２枚が敷設され，南南東隅に第12図の土器片が認められた。土器片は壺型土器で胴部径34cmの復原値になるものであるが石垣工事により石棺とともに損壊されたらしく，縦２つ割りの胴部部分が残されていた。埋納当時すでに頸部以上が欠きとられているが，石棺の内容積に比較して，副葬品であった可能性はうすい。墓壙は110×100cm程度，深さは第１層の地下げ工事以前の状態よりすれば60cm程度であったと考えられる。墓壙底には更に石材を固定するための細長い土壙が掘られていたが，北北西側のそれを検出し得たことは，石棺規模と形状を知る有力な手懸りとなった。

(4) 遺　物

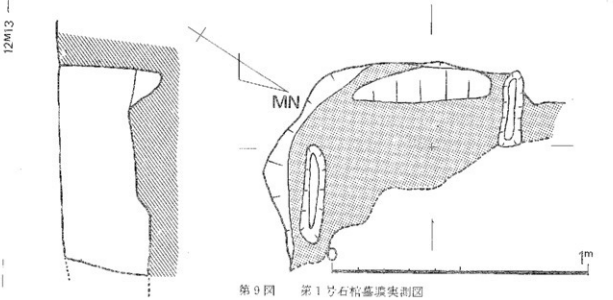
今次の調査によって得た遺物は，埋葬用大型土器６点，石器３点，剥片11点，土器片多数であった。以下，各遺物について述べることにするが，埋葬用の大型土器には，明瞭な壺型・甕型の土器の外に，壺型から甕型への埋葬用土器の転化を考えさせるものがあり，厳密には「壺棺」・「甕棺」と区別すべきものであろうが，明らかな壺型土器である第１号石棺内の土器と，第１号壺棺以外は便宜上「甕棺」として扱っていることを諒されたい。



第７図　第３号甕棺出土状況実測図

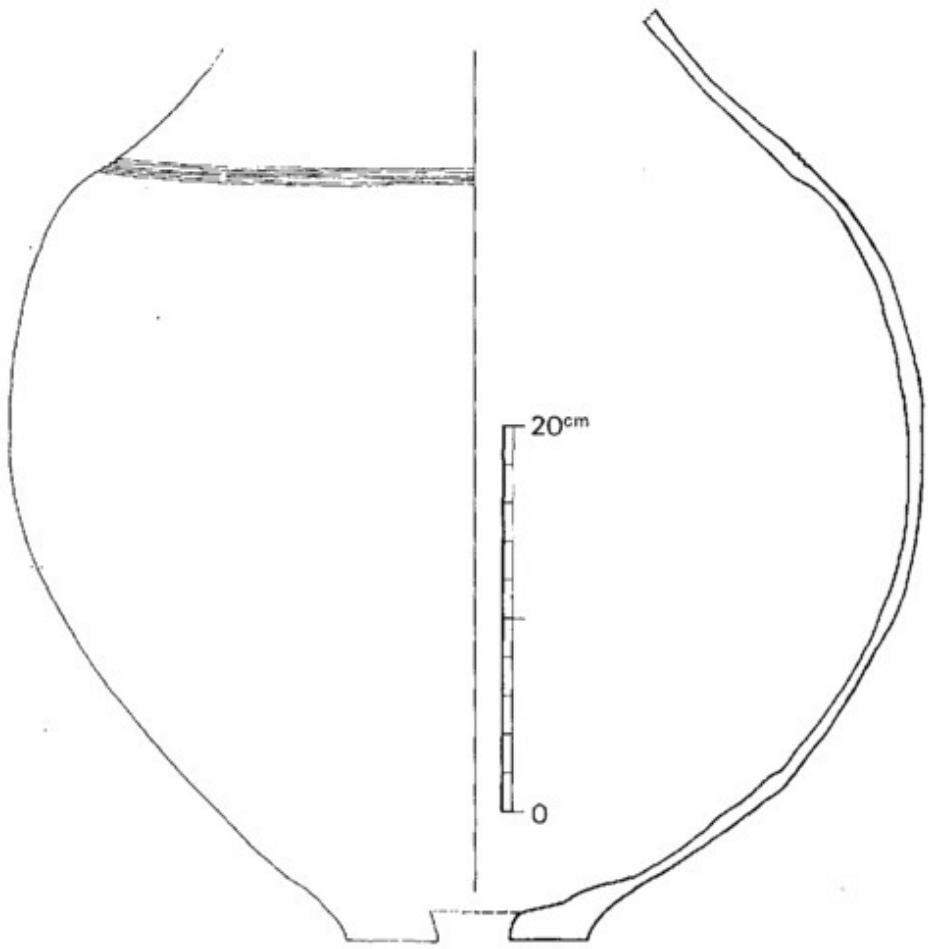


第8図　第1号石棺実測図



第9図　第1号石棺墓壙実測図

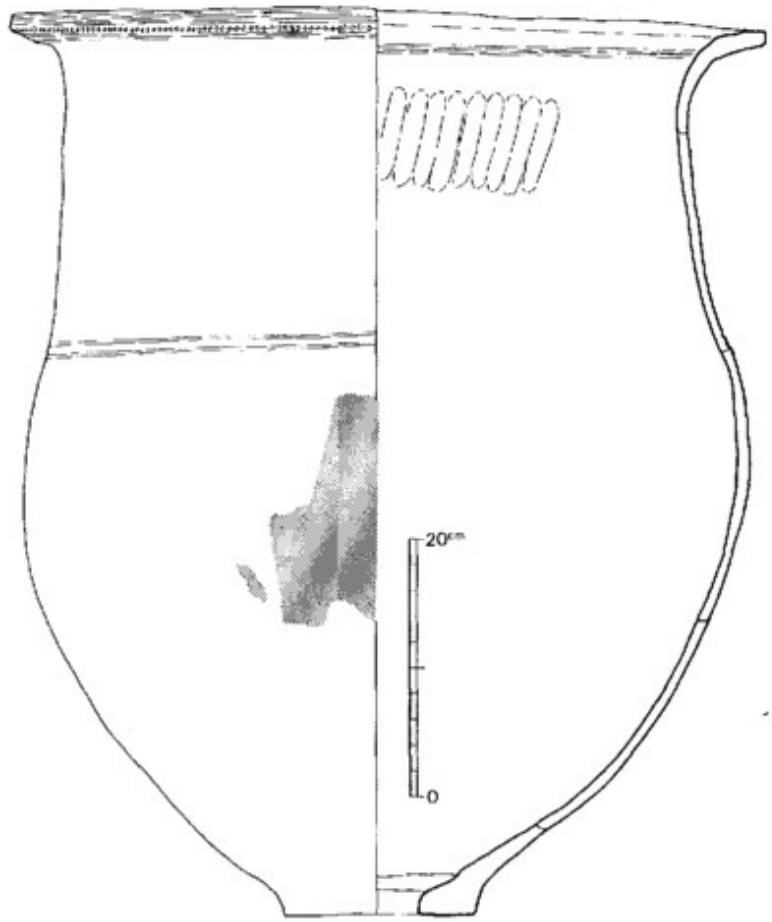
第１号壺棺（第10図，図版７）　梅の樹の移動作業によって，すでに除去されていた埋葬土器で，直立の状態であったといわれる。胴部と頸部の接合部のやや上方から欠きとられている壺形土器である。残存器高48cm，胴部最大径48cm，底部径12.4cmである。胴部は球型に張り出し，底部は狭小で全体に不安定な感じを与える。底部中央には内部からの穿孔があり，径約２cm程である。胴部と頸部の接合部外面に，鋭いヘラ状施文具による三条の沈線がめぐる。胴部と頸部の接合点は，外面においては殆んど目立たず，スムーズに移行しているが，内面において明瞭な継ぎ目が見られる。頸部は，内傾しながら，やや外反りになる。焼成良好で胎土も精緻であり石英粒を混入している。器面調整は横方向のヘラなでによっており，器の外面には化粧土がけが見られる。浜郷第II次調査における第７号棺には同形のものに，三条の沈線に区切られた綾杉文と，胴部最大径部に三条の沈線を施した例があるが，時期的には板付II式並行と考えられる。



第10図　　第１号壺棺実測図

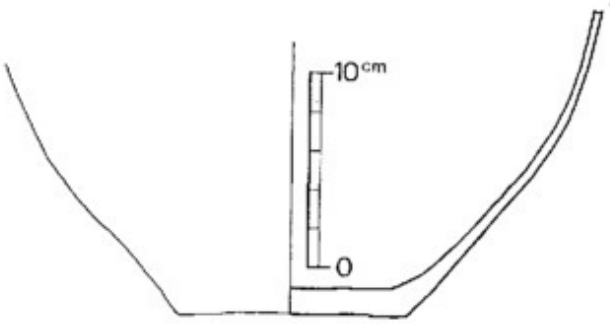
第２号甕棺（第11図，図版７）　１号と同様，梅の樹の移動作業によって，すでに除去されていたものであるが，直立の状態であったといわれる。器高70cm，口縁部の径58cm，胴部最大径55cm，底部径14.6cmをはかり，焼成良好である。黄灰色の器面は部分的に焼成時の黒斑が付着しているがヘラなでによる精緻な調整が見られる。口縁部直下内面に横方向の刷毛目が見られ，さらに下際には指頭による縦位の調整痕がある。刷毛目調整は口唇部外面部と刻目の下際にも施されている。器形は，胴部最大径部が下に下がり全体に安定感がある。胴部と頸部の接続はスムーズであり，二条の沈線部において僅かに両部分の区分が判別される。頸部のくびれはゆるやかで，僅かに内傾して立上り，口縁部の外反りは強いが肥厚は弱い。口唇部は断面が角ばった「コ」の字形となり，「コ」の字の下際に刻み目が施こされている。底部には内側からの穿孔が見られる。

本資料は，一応甕棺として扱ったが，器には，頸部と胴部の関係から厳密には「壺」形土器であり，いわゆる金海式甕棺の基本をふまえたものといえよう。九州西海の遺跡という前提はふまえる必要があろうが，形式的には弥生時代前期末とすることが可能であろう。



第11図　第２号甕棺実測図

第3号甕棺（第12図，図版8）　かつて行われたという地下げ工事によって胴部最大径部以上が欠失している。僅かに上がる底部以外に特長を示すものがないが，強い張り出しを持つ壺形土器である。底部径12cm，穿孔は人為的なものか否か判然としない。検出時明瞭な土壙内に直立していたが，1・2号棺と同様の埋設法をとったと考えられる。時期については不明確であるが，1・2号棺と大差ないものと考える。



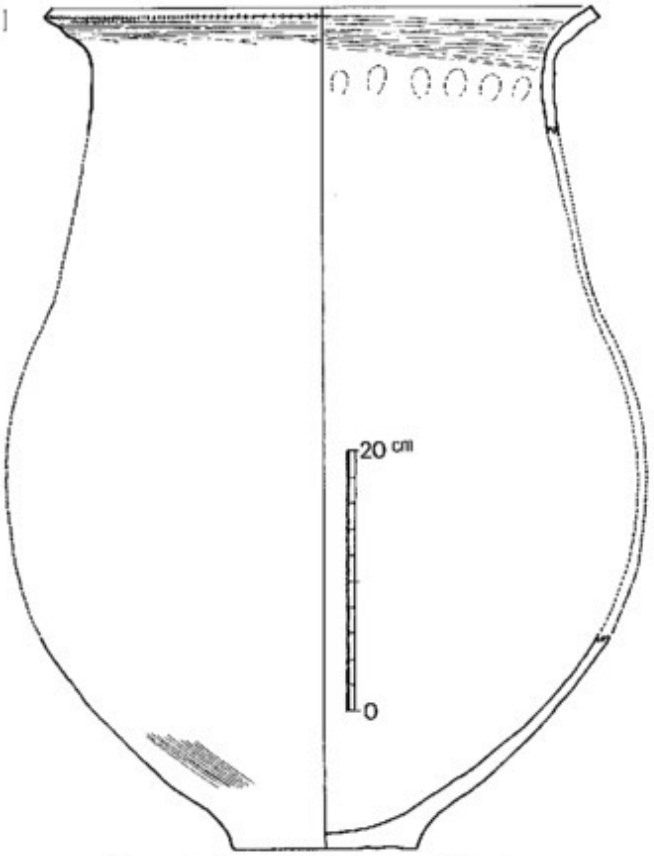
第12図　第3号甕棺実測図

第4号甕棺（第13図，図版9）　石垣の間から採集した資料で発掘によるものではないが，埋葬用の大形壺であることは明瞭であり，便宜上，発掘による検出資料に続けて甕棺番号を付した。採集した部分は口縁部から頸部上側と胴部下際から底部にかけてであり，図上復原すれば図示したごとく，第2号甕棺を，より「壺」形に近くした形状となろう。推定器高64cm，口縁部径43cm，胴部最大径は52cm程の規模の大型甕棺である。外反する口縁部は2号甕棺ほど強くなく，より「壺」的である。口縁部は断面が角ばり「コ」の字形をなし，下際に刻み目を一列めぐらしている。口縁部の内外面に横方向の刷毛目調整を施こしている。器外面は全体的に，ヘラによる横方向のナデが見られ，頸部上際は，ヘラを上反りに連続使用しており，口縁外面をやや肥厚させる意図がうかがわれる。穿孔については破片であるため明瞭でない。胎土・焼成ともに良好であり黄灰色の胎土には石英の微粒の混入がある。

残存する頸部の傾きは，2号甕棺に比してより直線的であり，頸部と胴部の接続部は，より明瞭な器形であったと考えられる。2号甕棺と同じ基本的要素を備えているが，2号甕棺より形式的には古いものと考えられる。弥生時代前期後半ないし，終末とすることが可能であろう。

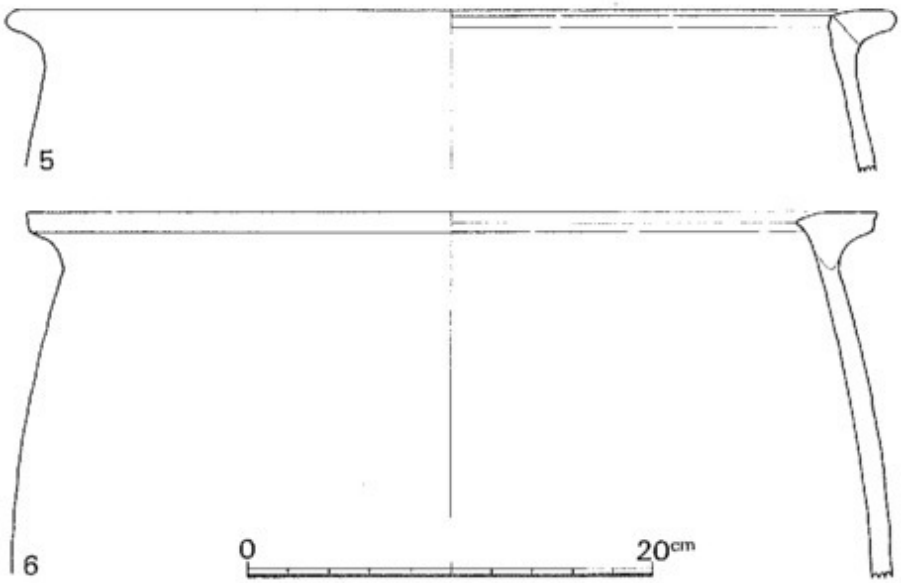
第5号甕棺（第14図，図版10）　石垣の間から採集した資料であるが，大型の甕棺口縁部であり，保存状態良好である。図上復原による口縁部径は44cmで逆「L」字形の断面をもち，口径に比して上面の幅は狭い。口縁内側には微弱な稜を有している。器面内外とも，ヘラによる横方向の調整が見られるが，口縁上面には一部刷毛目が見られる。黄灰色の胎土には石英の微粒を含み焼成はきわめてよい。器形の全容は本資料から不明であるが胴部の張りはさほど強く

ないものと考えられ，形式的には弥生時代中期前半に位置づけられよう。



第13図　第４号甕棺（表面採集）実測図

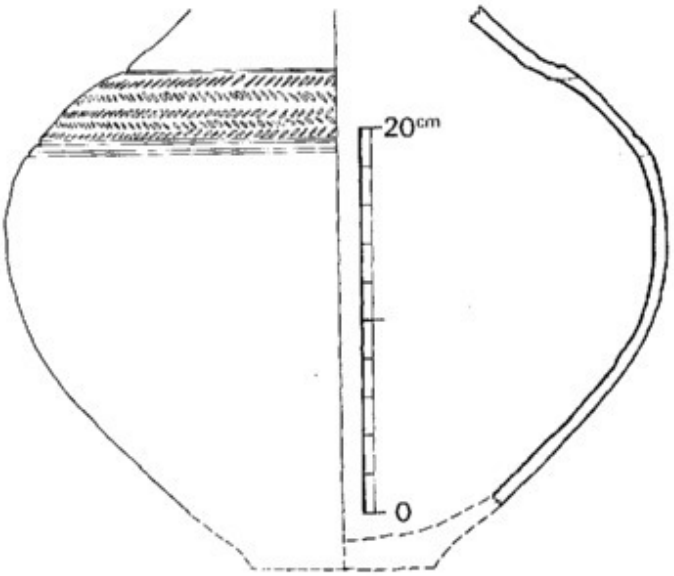
第６号甕棺（第14図・図版10）
第５号同様，石垣から採集した資料で，甕形の土器片である。図上復原による口縁部径は42cmを計る。５号よりも口縁内側は，明瞭な稜をもち，微弱ながら「T」字形に近い断面をしている。口縁上面はややふくらみ，口縁外側は角ばった断面をみせる。胴部の張り出しはさほど強くなく，口縁径と同等程度になるものと考えられる。焼成はよく，石英微粒を含む黄褐色の胎土は横方向のヘラなでがみられる。口縁部上面には刷毛目調整がみられる。弥生時代中期前半の要素をもつものと考えられる。



第14図　第５・６号甕棺（表面採集）実測図

第１号石棺内の土器（第15図，図版８）　１号石棺内において発見された壺形土器片で，石垣工事によって石棺もろとも縦に半割されたものである。頸部と胴部の接合部の若干上方で欠きとられているが，全体の半分程度が残されておりほぼ全容を知ることができる。胴部径は34㎝をはかり，最大径は，胴部中位よりやや上った部位にある。胴部の張りはやや弱い球形となり，口縁部近くではやや直線的である。頸部と胴部の接合部は内外とも１号壺棺より顕著であり，接合部下胴外面に綾杉状の施文帯がある。施文帯の上辺は１条，下辺は２条の沈線でもって区切られている。器全体に横方向のヘラ調整が見られ，黄灰色の胎土・焼成とも良好である。石英の微粒を含む。

欠きとられた頸部はやや強く内傾しながら直線的な立上りをもち，外反する口縁部に連なるものと考えられる。板付II式の特長をよく備えており，前期後半の資料である。本資料そのものは，日常使用されたものと考えられるが，石棺内における容積を考慮すれば，小型の棺と考えられ，副葬品とは考え難い。



第15図　第１号石棺内土器実測図

石器（第16・17図，図版９）　今次の調査において１層より得た石器は礫石器２点，石鏃１点，黒燿石剥片11点である。１は，磨石を転用した敲打用の礫器である。やや扁平な安山岩円礫の両側に粗大な剥離面を重ね，片面からの加工を行っている。礫の側縁と中央部に使用による磨滅が見られ，磨石であったと考えられる。本資料は，礫の両側縁に片側からの加工を加えているところよりすれば，西北九州海岸における縄文時代の遺跡においてしばしば見られる敲

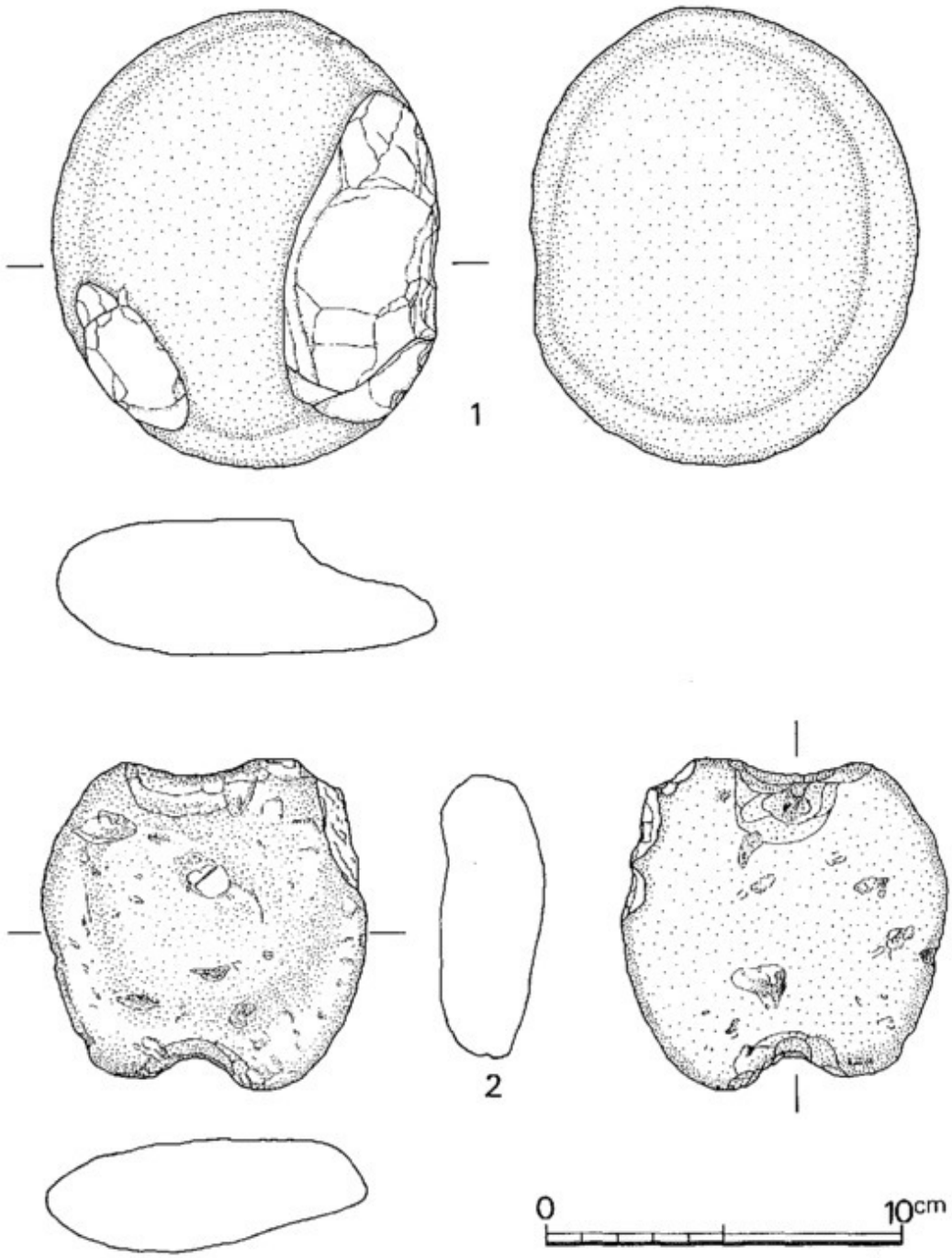
打器に類似している。この種の礫器が弥生時代の遺跡においても出土した例が最近の調査において見られており，縄文時代の伝統を強く残した五島列島の弥生時代の石器として注意を要する。

2は，安山岩の扁平円礫を用いた石錘であり，重量350ｇを計る。礫の長軸上の両端に，両面から剝離して「紐かけ」を作り出している。形態的には五島列島各地にも広く見られるものであるが，地域的に見た場合，1と同様注意を要しよう。第17図は光沢ある黒燿石製の石鏃で，軸長 2.5cmでやや大型に属する。両面とも基部に一次的剝離面を残して，両側縁部には微細な二次加工が見られる。図面を倒置してみると台形様石器とも見られるが，一応石鏃として提示した。剝片群には整一な技法と石核は認められない。

(5) 殿寺遺跡の成立と終末

殿寺遺跡は先にのべたごとく，個人による石垣補修工事に際して実施したもので，発掘面積僅か６㎡であった。その中で４基の埋葬遺構を見たので，平均1.5㎡に１基の密集度で弥生時代墳墓群が遺存していることになる。遺跡は，なお今次調査地点の南側に相当広範囲に包蔵されている可能性が強いので，今次調査資料のみから殿寺遺跡の性格や時期を判断するには限界があるが，一応の結語を述べることにする。

出土甕棺の形式よりすれば，１号石棺内の壺および１号甕棺（弥生時代前期後半），第４号および第２号甕棺（同前期末），第５号および第６号甕棺（同中期前半）という順序になり，殿寺遺跡の時期は，一応弥生時代前期後半から同中期前半に位置づけることができよう。近隣諸島の弥生時代墓地をあげれば，近隣宇久島の松原遺跡があり，板付Ⅰ式小壺を副葬する石棺から下限は後期前半に下る甕棺まで確認されており，支石墓が確認され，貝製副葬品も多く伴っている。更に昭和52年の春に県教育委員会担当によって実施された緊急発掘によって，29基の埋葬遺構が調査され，前回の調査結果が補強された。また，同じ上五島の中通島浜郷遺跡においては61体の埋葬人骨と埋葬遺構が調査され，弥生時代前期後半（板付Ⅱａ）から同中期中頃（須久Ⅰ式）までの大墓地であることが判明し，土器，貝製品，猪下顎の副葬品等が確認されている。特に，アワビ貝や猪下顎骨の副葬が埋葬風習か否かは速断できないとしても注目され，柱状抉入石斧の副葬例は，九州西辺における注目すべき事柄であった。このことは，昭和54年，県教委が行った福江島白浜貝塚の調査においても２点の方柱状石器や磨製石鏃片が前期後半の貝層において確認された例とあわせて興深いものがある。殿寺遺跡は，調査面積も狭く，松原遺跡・浜郷遺跡・大浜遺跡が砂丘に立地していることや，白浜貝塚が砂丘であるうえに貝塚を伴うといった好条件を備えていることと比較すれば，強粘質の土質に立地しているため，骨角質の残りにくい条件下にある。ただ，１号石棺の残存状態が，方形に近いプランをもち，石垣に使用されていた石材のうち，石棺材と同質の小型板状石材が多く見られたことは，積石



第16図石器実測図 ①

第17図　石器実測図 ②

状の石棺墓であった可能性を示唆しており，浜郷遺跡や松原遺跡の同種遺構を想起させるものがある。さらに，本遺跡1・2・3号甕棺が直立に近い状態であったことは特異な埋置法を示唆するものであり，3号棺は文字どおり直立の状況にあったことが注目されるところである。

いずれにしても，本遺跡は，五島列島における弥生時代墓制についての研究を補強するものであり，その保存が強く望まれるところである。

〈参考文献〉

1　入門講座　弥生式土器――九州4―　小田富士雄　考古学ジャーナル　No.82　昭和48年

2　大型甕棺の編年について――ことに形式設定の手続きの問題に関して　高倉洋彰　九州歴史資料館研究論集4　昭和53年

3　福岡市金隈遺跡第二次調査概報　折尾学　福岡市埋蔵文化財調査報告書17　昭和46年

4　五島列島の弥生文化総説篇　小田富士雄　長崎大学医学部解剖学第2教室　人類学考古学研究報告　2号　昭和45年

5　弥生時代における細形銅剣の流入について　森貞次郎　日本民族と南北文化　昭和43年

6　里田原遺跡　正林護・安楽勉・副島和明・井上和夫・藤田和裕　長崎県文化財調査報告書第21集　長崎県教育委員会　昭和50年

7　大浜遺跡　酒詰仲男　長崎県文化財調査報告書第2集　五島遺跡調査報告　長崎県教育委員会　昭和39年

8　白浜遺跡　正林護・安楽勉・松下孝幸　福江市文化財調査報告書第2集　福江市教育委員会　昭和55年

9　門田遺跡の調査　柳田康雄他　山陽新幹線埋蔵文化財調査概報　福岡県教育委員会　昭和50年

10　横隈山遺跡　浜田信也他　福岡県小郡市三沢所在遺跡の調査概報　小郡市教育委員会　昭和49年

11　諸岡遺跡　横山邦継他　板付周辺遺跡調査報告書（2）福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集　福岡市教育委員会　昭和50年

12　門田遺跡　4弥生時代の遺構と遺物　柳田康雄他　山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告　春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査　第3集　福岡県教育委員会　昭和52年

13　剣塚遺跡群の調査　中間研志　九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告XXIV下巻　福岡県教育委員会　昭和53年

6　小値賀町の主要遺跡

——最近の資料から——

小値賀町の遺跡については，全国遺跡地図長崎県（昭和51年　文化庁刊）において30遺跡が収録されている。町内遺跡出土の遺物についても，地元の研究家近藤政秀氏による大量の好資料があり，整理がまたれるところである。本報の殿寺遺跡についても弥生式土器片等の表面採集例が従前からあって，遺跡地図にも収録をされている。

一方，五島列島における遺跡群についても広範な遺跡・遺物の存在が知られていた。古くは長崎県の先史古代研究の原典ともいうべき津田繁二氏の業績があり，桑山龍進・江坂輝弥氏等の業績があいつぎ，これらは，地名表として後年あらわされ，全国遺跡地図としてまとまることとなったのである。正式の発掘調査も，あいつぎ系統的研究も見られ，五島列島の姿は九州の文化と一体のものであることが明らかとなってきた。

反面においては，全般的な研究着手の遅れていた，旧石器時代ないし，縄文時代の古い時期の五島列島に関する知見は宇久島を除いて不鮮明のままであったことも事実であった。最近では，五島列島のれい明ともいうべきこれらの時期の遺跡遺物についての知見もやや増加しつつある。本報の遺跡調査に際して，地元教育委員会の塚原博氏によって，すぐれた遺物の発見があっており，それらを紹介して，今後の研究の一助としたいと思い，本項を設定した。同氏によって町誌に収録されたものもあり重複する部分もあるが，目立った遺物を出土した遺跡について概述することにする。本項各遺跡の次に（　）で示した数字は，別項，「小値賀町の歴史的環境」の項の町内遺跡一覧および，町内遺跡地図の番号と一致する。

○玉石鼻遺跡（２）

小値賀島本島の西北約200ｍの海上にある斑島の北部にある遺跡であり，塚原氏の採集資料に図版11のナイフ形石器がある。やや乳白色をおびた黒燿石製品であり，小値賀町の最古期を物語る好資料である。

○前方神社遺跡（21）

小値賀本島の東海岸，神島神社付近の散布地より採集された石器に図版11の三稜ポイントがある。光沢ある黒燿石製品で，裏面は主要剥離面をそのまま残しているが，断面三角形の２面は微細な二次加工が行われている。

○殿寺海岸遺跡（20）

本報の遺跡ののる低平な台地の辺端部出土の遺物に，図版11の槍先状の尖頭器がある。表裏とも，微細な二次加工が見られる。時期は不明であるが，光沢ある黒燿石製の好資料である。

○はもき遺跡（３）

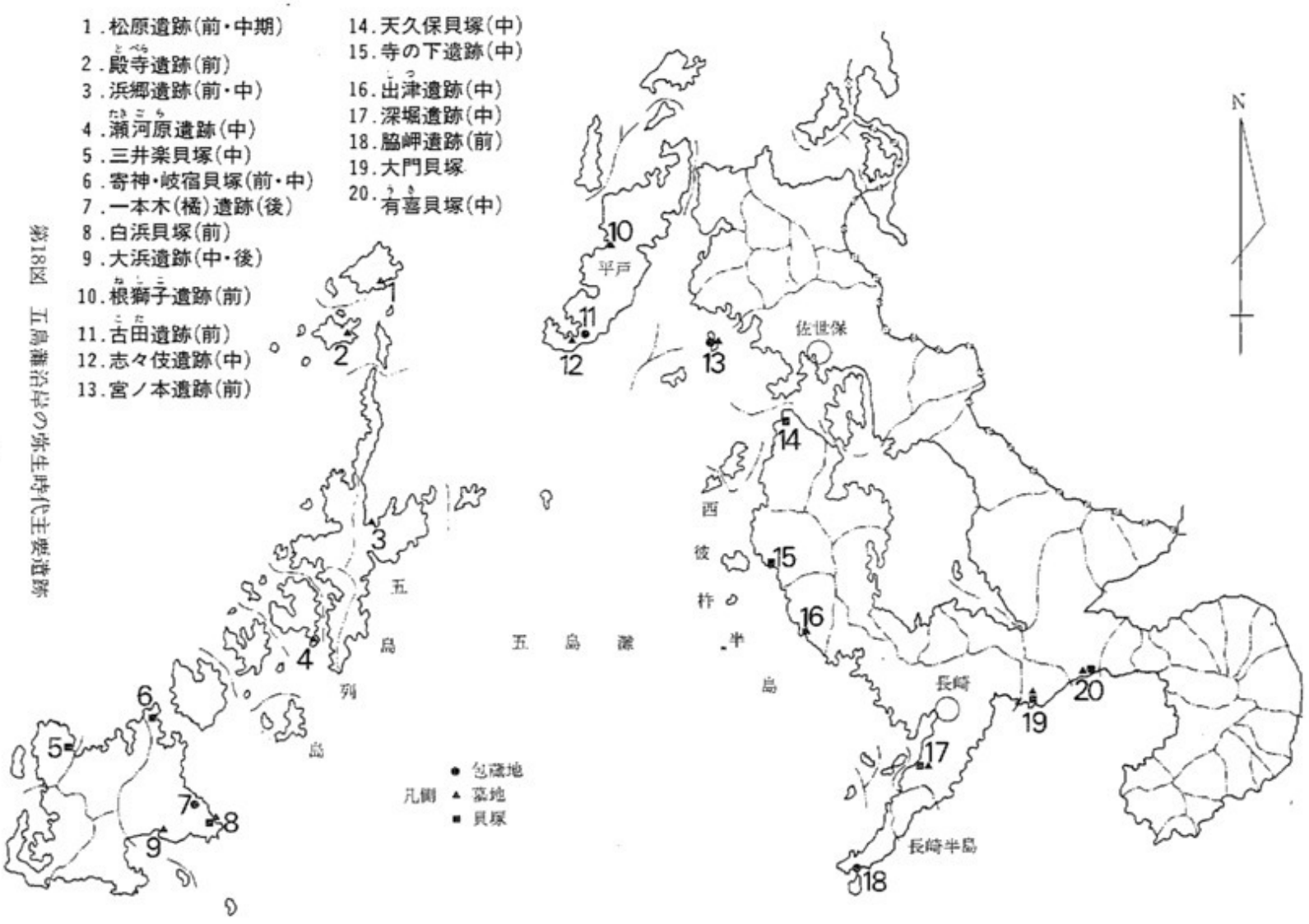
斑島と小値賀本島間に最近架橋が行われたが，その斑島側の橋脚南側海岸において，新たな遺跡の発見があり，はもき遺跡と命名された。図版11の押型文土器の発見があり，縄文早期の遺跡が確認された。土器の外面はこまかい山形押型が施文され，内面は口唇下５cm程度の部位まで同様の施文が見られる。押型文土器の発見は，福江島鬼岳周辺で地元の研究家松崎久磨治氏の採集になる小片があるが，上五島地区では初例である。

○小渕遺跡

町の教育委員会に保管されていた資料中に図版11の弥生式の小型の壺型土器がある。口縁部をのぞけば，ほぼ完形の好資料であるが出土地不詳である。一応「小渕遺跡」とされているが，当該遺跡地は不明である。時期は弥生時代前期後半とすることができよう。

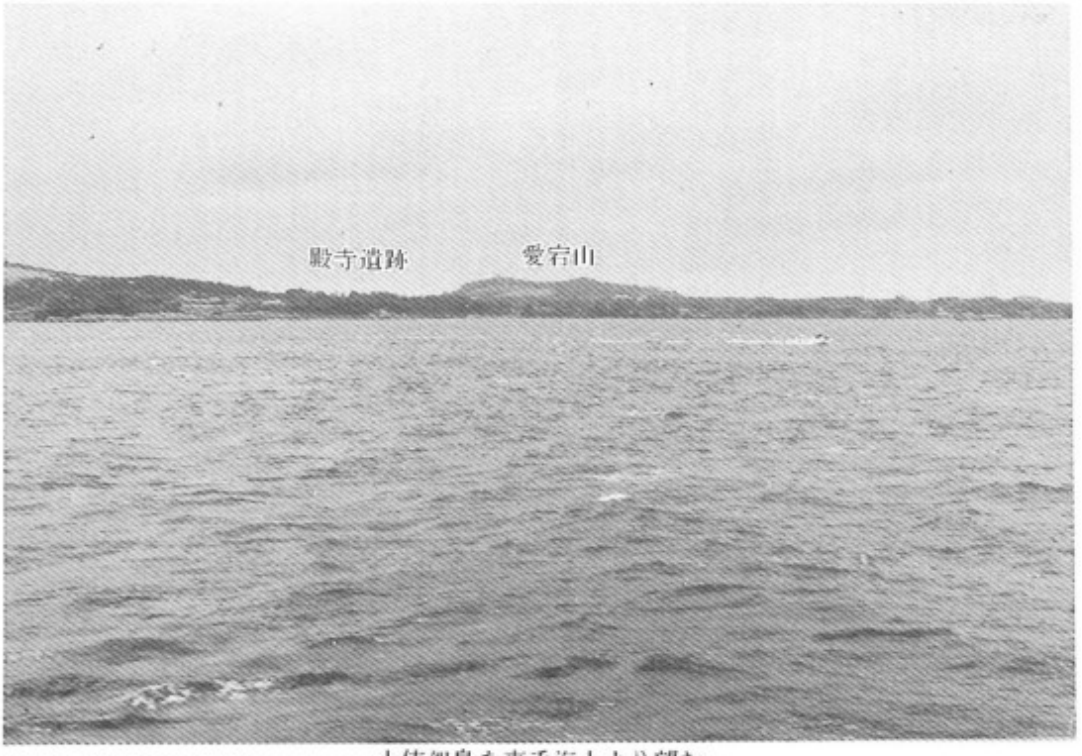
〈本稿参考文献〉

1　全国遺跡地図　長崎県　文化庁　昭和51年
2　我長崎県の先史時代及び原史時代の遺跡遺物の概要について　津田繁二　長崎談叢26　昭和15年
3　南松浦郡出土遺物並びに地名報告　長崎談叢18　昭和10年
4　長崎県五島列島小値賀島宇久島の遺跡　江坂輝弥　日本考古学年報11　昭和37年
5　長崎県遺跡地名表　長崎県教育委員会　長崎県文化財調査報告書第１集　昭和37年
6　地元の研究家瀬尾泰平氏は長年，宇久島城ケ岳付近における遺物採集を続けられ，特に細石刃・細石刃核が整理収蔵されている。
7　小値賀町郷土誌　小値賀町教育委員会　昭和53年



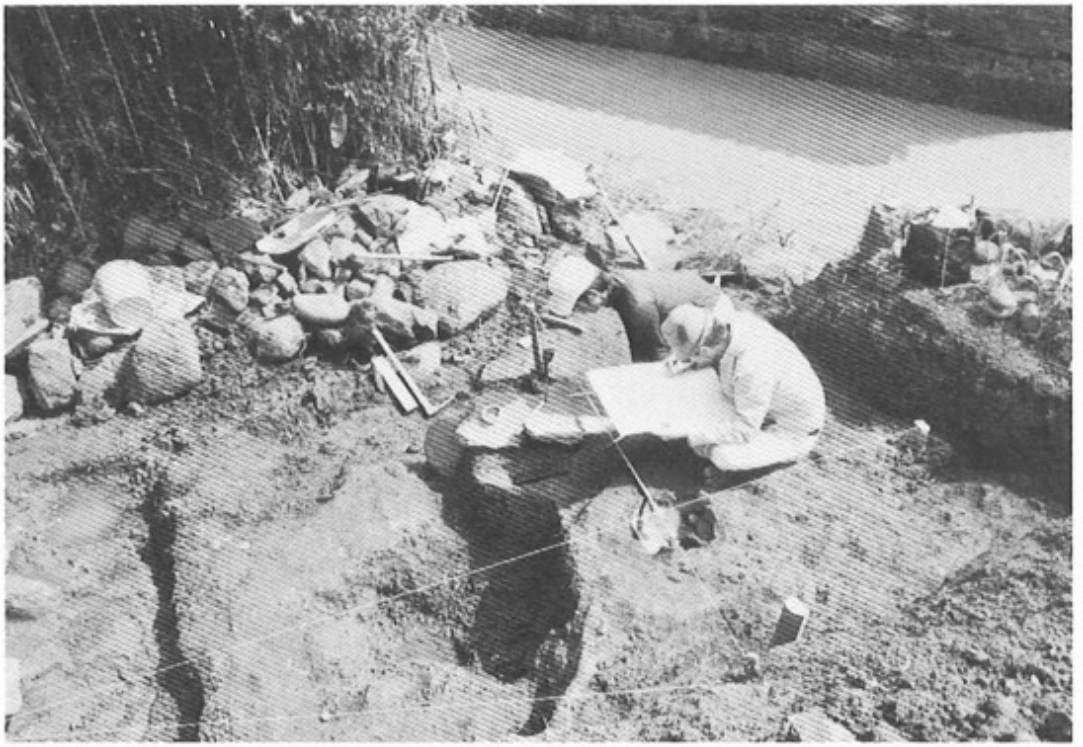
第18図　五島灘沿岸の弥生時代主要遺跡

図　　版



小値賀島を東手海上より望む

遺跡，左手畑地が殿寺遺跡



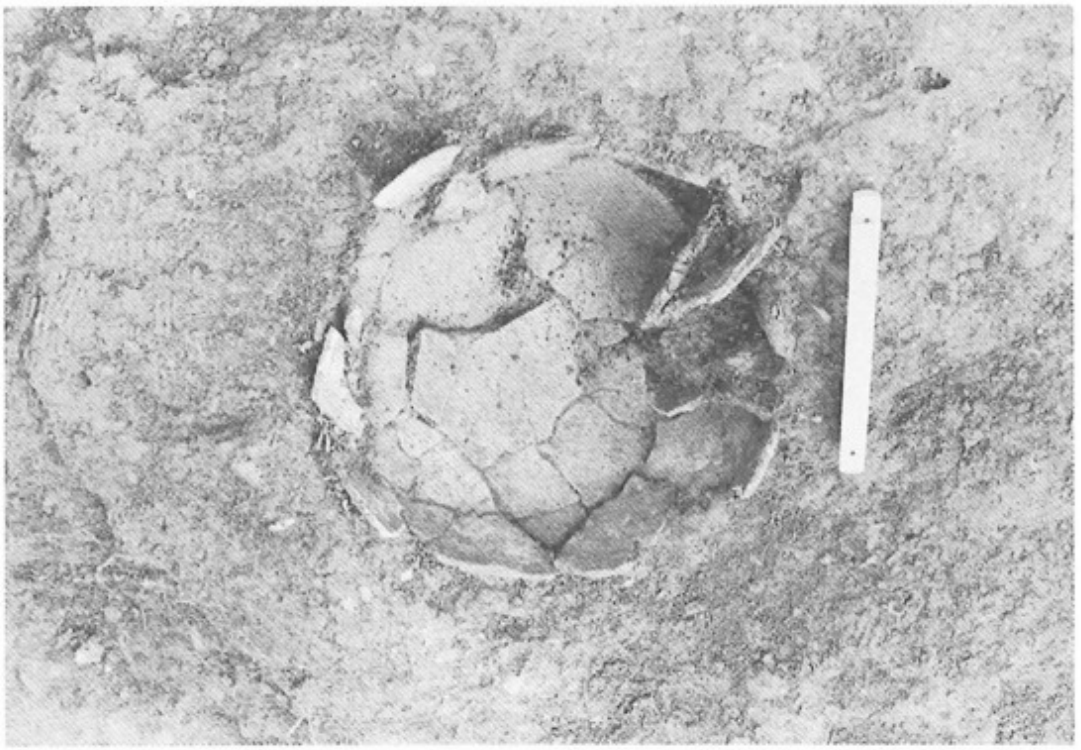
調 査 風 景

遺構の配置（南側から）

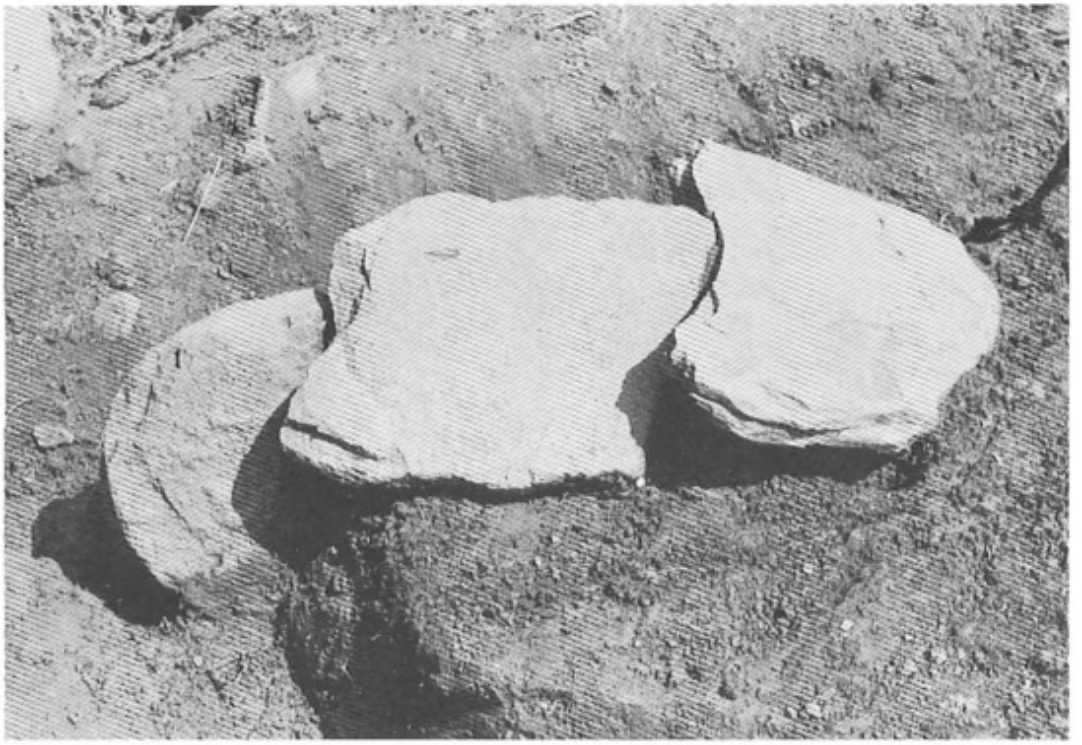
土　層（南側）

３号甕棺検出状況

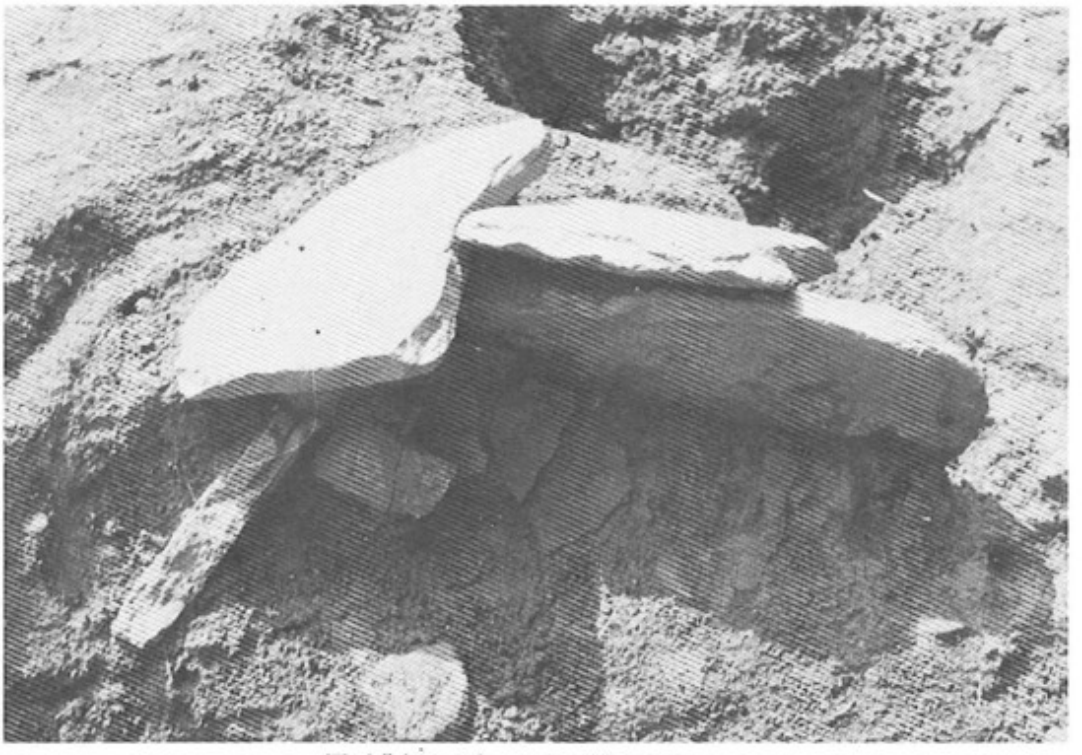
1号石棺・3号甕棺発掘状況



3号甕棺埋設状況



１号石棺（南側から）



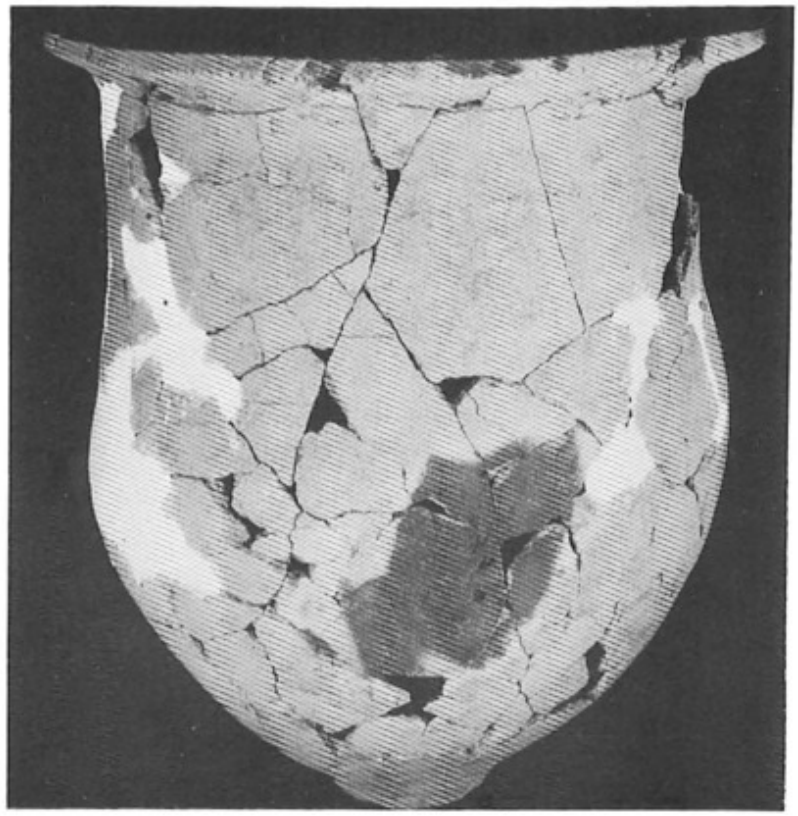
同（北側から），壺型土器出土状況

1 号石棺と土壙，右側（南壁材）と左（北壁材）は失われている。

1 号石棺の墓壙

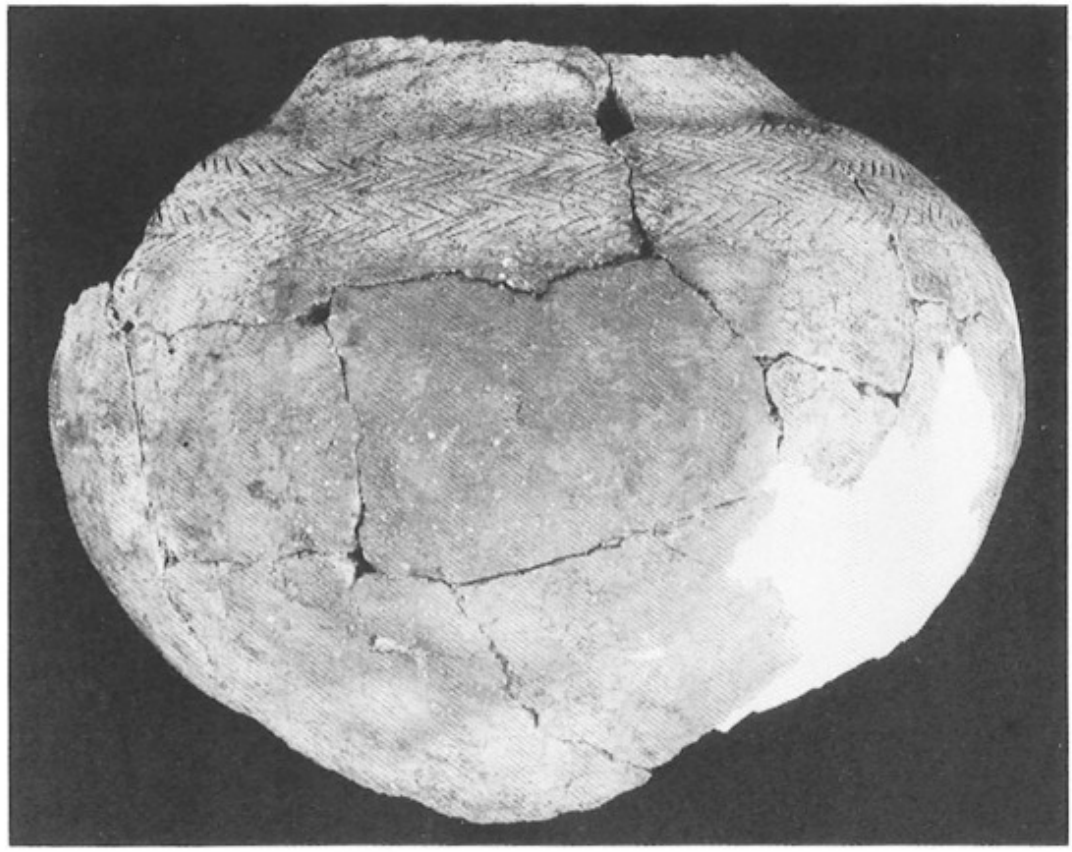
▲第１号壺棺（現高48cm）

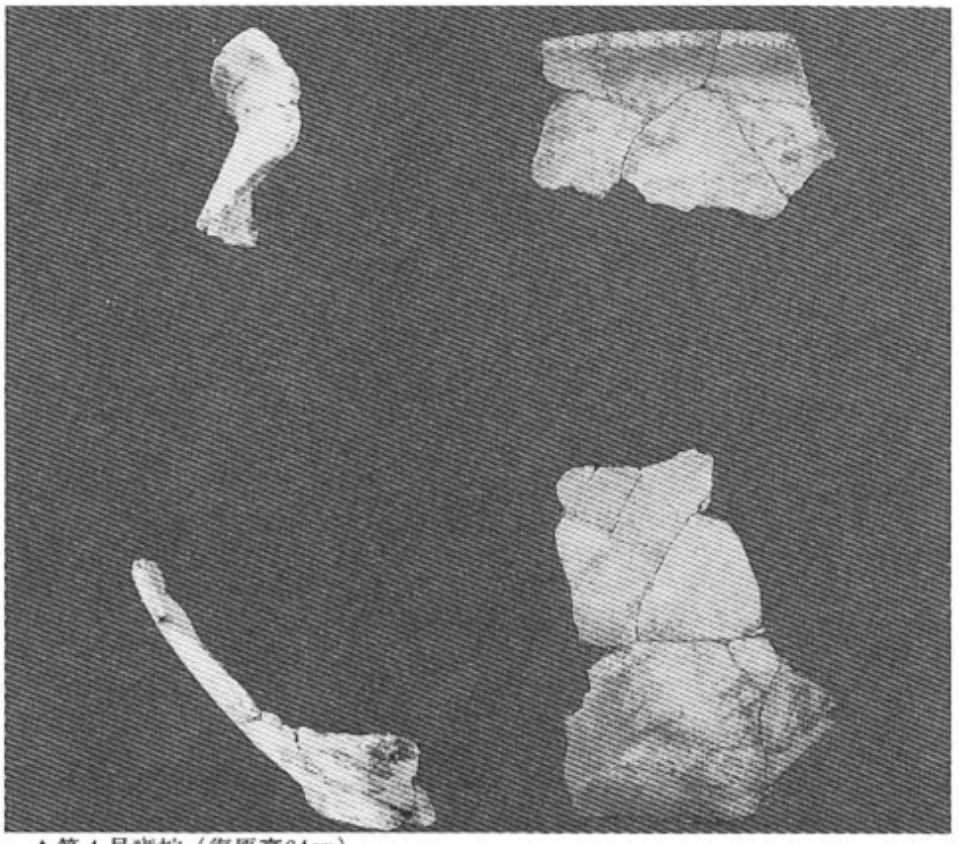
▼第２号甕棺（器高70cm）



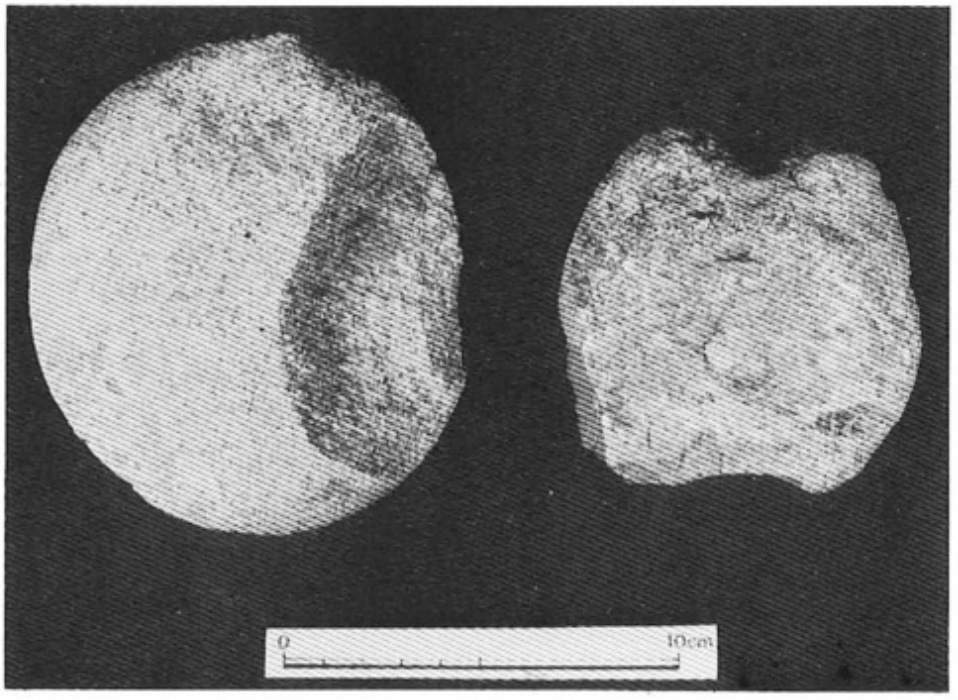
▲第3号甕棺（底部径12cm）

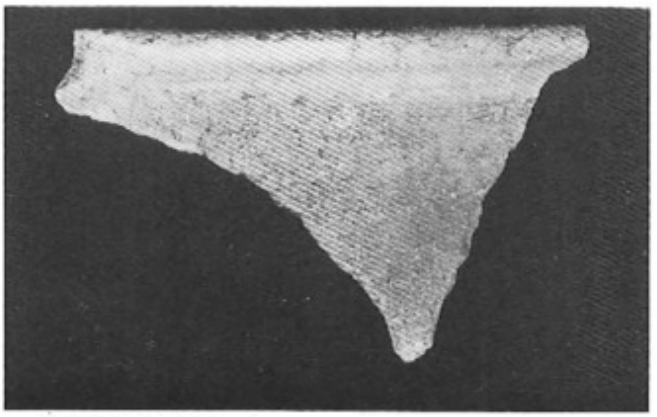
▼第1号石棺内壺（胴径34cm）





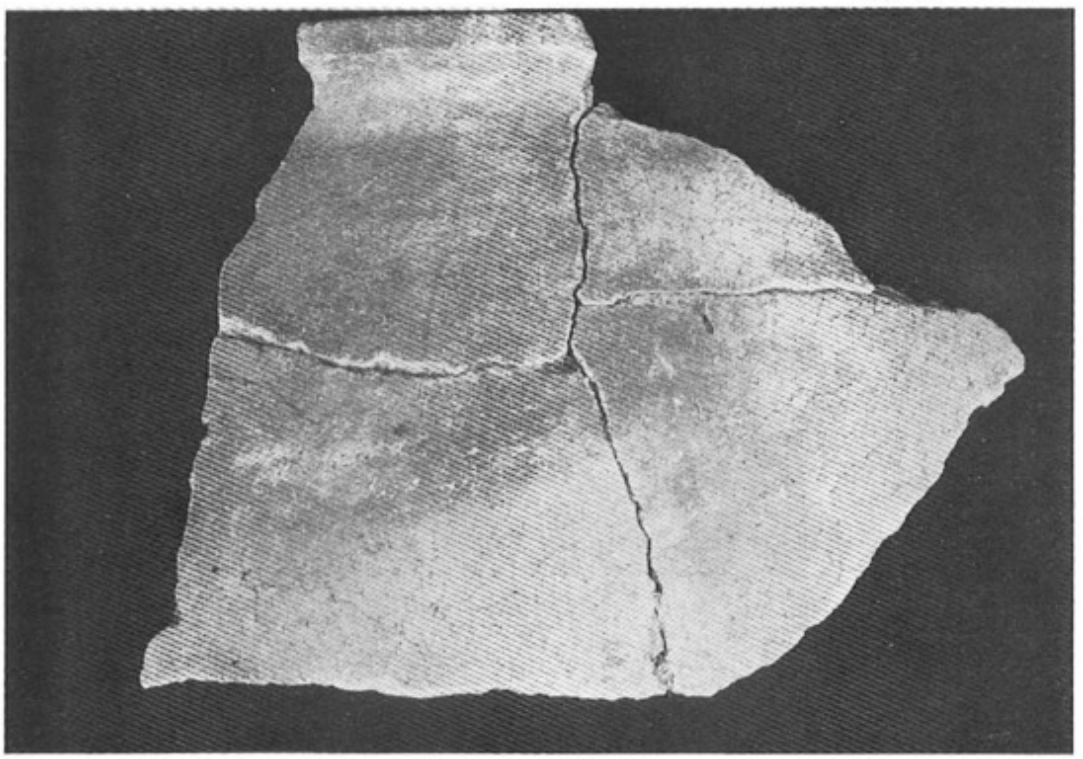
▲第 4 号甕棺（復原高64cm）

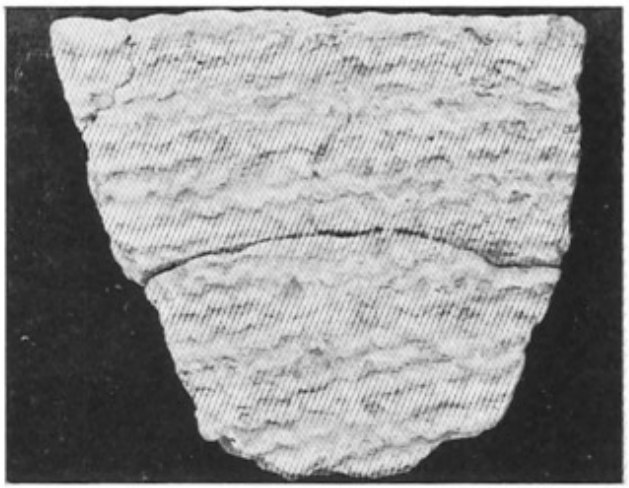


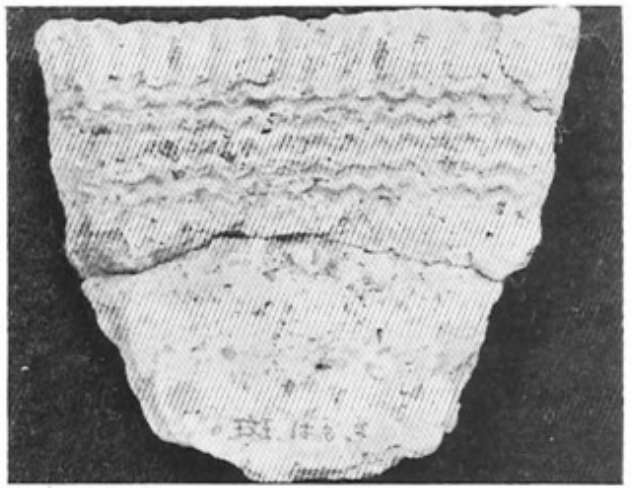


第5号甕棺（$\frac{1}{2}$）

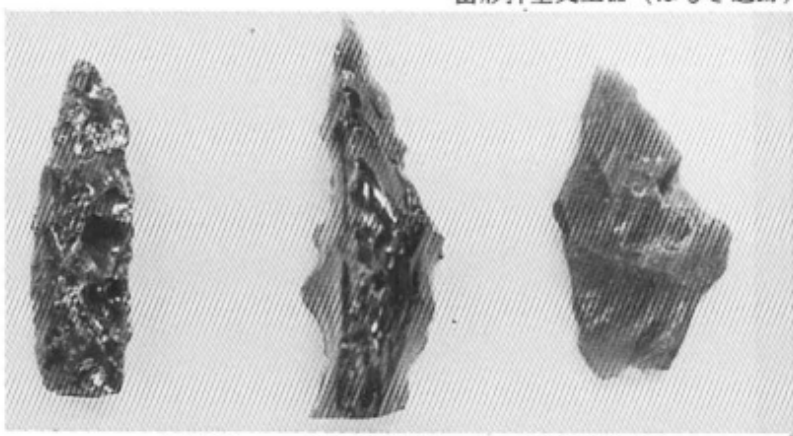
第6号甕棺（$\frac{1}{2}$）



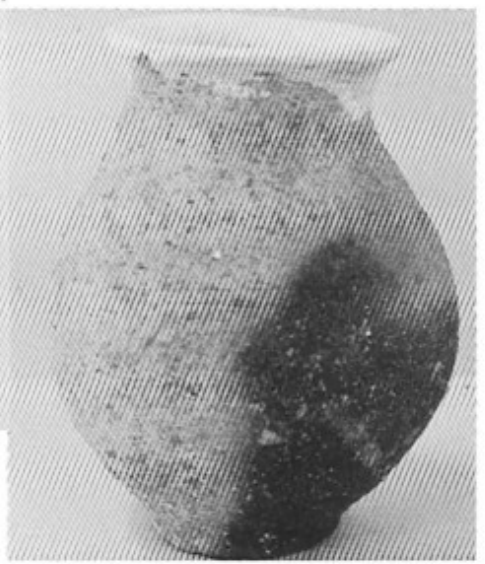




山形押型文土器（はもき遺跡）



尖頭器（殿寺海岸）・三稜尖頭器（前方後目遺跡）・ナイフ形石器（玉石鼻遺跡）



弥生式土器（小渕遺跡）器高13cm

図版11　小値賀町内出土の遺物

ひさご塚古墳

――東彼杵郡東彼杵町所在――

鬼の穴古墳
野田古墳

――――大村市所在――――

例　　言

1　本報告は，長崎県教育庁文化課の主催による，長崎県埋蔵文化財発掘技術者講習会の，昭和49，50，51年度の成果の一部を報告するものである。

2　各年度における講習会の実施期間・参加者・担当者は，後述のとおりである。

3　本報告に使用した図は，講習会に参加した全員で分担作製したものである。

4　使用した写真は，講習会に参加した文化課の担当者の撮影によるものである。

5　本報告の執筆・編集は藤田が行った。

なお，最後になったが，以上の講習会を実施するにあたっては，鬼の穴古墳の土地所有者で小路口郷の小森氏，野田古墳の土地所有者で野田郷の福重氏，大村市教育委員会，東彼杵町教育委員会，県立果樹試験場，農業改良普及所，東彼杵町農民研修センターに，宿舎の提供その他にわたって多大の御援助と御協力を得た。記して謝意を表したい。

本　文　目　次

頁

1　はじめに……50
2　立地と環境……52
3　ひさご塚古墳……53
4　鬼の穴古墳……57
5　野田古墳……61
　野田古墳出土の須恵器……63

挿　図　目　次

頁

第１図　ひさご塚古墳・鬼の穴古墳・野田古墳位置図……52
第２図　ひさご塚古墳位置図……53
第３図　ひさご塚古墳周辺地形図……54
第４図　ひさご塚古墳　墳丘実測図……55
第５図　鬼の穴古墳・野田古墳位置図……56
第６図　鬼の穴古墳周辺地形図……57
第７図　鬼の穴古墳　墳丘実測図……58
第８図　鬼の穴古墳　石室実測図……59
第９図　野田古墳　石室実測図……62
第10図　野田古墳出土須恵器実測図……63

図　版　目　次

頁

図版１　ひさご塚古墳……74
図版２　ひさご塚古墳・上杉古墳群……75
図版３　ひさご塚古墳調査風景……76
図版４　鬼の穴古墳……77
図版５　鬼の穴古墳調査風景……78
図版６　鬼の穴古墳石室……79
図版７　野田古墳遠景……80
図版８　野田古墳調査風景……81
図版９　野田古墳石室（1）……82
図版10　野田古墳石室（2）……83
図版11　野田古墳出土の須恵器……84
図版12　講習会実測実習風景（昭和49年）……85
図版13　講習会実測実習風景（昭和50年）……86
図版14　講習会参加者および協力者……87

1 はじめに

本項は，昭和49年・50年・51年に実施した「長崎県埋蔵文化財発掘技術者講習会」によって得た成果を報告するものであるが，この講習会は，県内市町村の文化財行政担当職員および長崎県文化財保護指導員に対して，埋蔵文化財の調査技術および文化財保護法に関する研修を行い，埋蔵文化財保護に資することを目的として実施されたものである。

第1回目は，昭和44年，社会教育課であった時に，諫早市の本明石棺群を対象とし，文化課になってからは，昭和47年に，大村市で玖島崎古墳群などを対象としている。昭和48年には，西彼杵郡多良見町の化屋大島石棺群の調査を行っており，この時の調査結果は，昭和49年8月，多良見町文化財調査報告書第2集として報告されている。

本項に関係のある講習会については，年度ごとに概要を記しておきたい。

昭和49年度

鬼の穴古墳を対象とし，石室の実測，墳丘測量，周辺の地形測量

日　時　　昭和49年8月19日～8月25日（7日間）

参加者

白石芳光	（生月町生月中央公民館）	河野忠博	（大村市大村小学校）
植村高義	（芦辺町文化財専門委員）	力武一成	（松浦市志佐中学校）
本山昭雄	（鹿町町鹿町工業高校）	松下利秀	（松浦市今福中学校）
下村孝男	（松浦市今福中学校）	木戸庄吾	（岐宿町教育委員会）
山内俊行	（郷ノ浦町教育委員会）	関　正和	（東彼杵町文化財審議員）
樋口希輝	（東彼杵町教育委員会）	浦山博子	（上県町伊奈小学校）

昭和50年度

ひさご塚古墳，野田古墳を対象とし，ひさご塚古墳の墳丘および周辺地形の測量，野田古墳の石室実測

日　時　　昭和50年8月19日～8月25日（7日間）

参加者

斉藤弘征	（豊玉町南小学校）	樋口希輝	（東彼杵町教育委員会）
池田成彬	（小浜町小浜高校）	後瀬要一	（諫早市小野中学校）
田嶋　将	（諫早市教育委員会）	西山敏勝	（小長井町小長井小学校）

昭和51年度

ひさご塚古墳と上杉古墳群を対象とし，ひさご塚古墳の墳丘のトラバース測量と，上杉古墳

群と周辺の地形測量

日　時　　昭和51年７月29日～８月４日（７日間）

参加者

井手敏彦　（高島町高島高校）
寺坂栄一郎（大村市大村園芸高校）
坂本厚生　（琴海町琴海高校）
佐藤十郎　（県文化財保護指導員）
江口勝介　（長崎市鐙屋小学校）
後瀬要一　（諫早市小野中学校）
植村高義　（芦辺町文化財専門委員）
西山敏勝　（小長井町小長井小学校）
森永邦彦　（佐世保市佐世保西高校）
伊藤安子　（東彼杵町彼杵小学校）
古門雅高　（山口大学学生）
井手寿謙　（県文化財保護指導員）
山口祐造　（諫早市教育委員会）
寺田浩明　（厳原町対馬高校）
加藤十久雄（佐世保市ろう学校）
池田成彬　（小浜町小浜高校）

長崎県文化課からは，

昭和49年度　田川　肇・高野晋司・藤田和裕

昭和50年度　正林　護・安楽　勉・藤田和裕

昭和51年度　正林　護・高野晋司・副島和明・宮崎貴夫・藤田和裕が参加した。

各年とも夜間は，土器・石器の実測実習を行い，文化財保護法についての講義，県内の遺跡とその調査風景のスライド会などを実施した。

2　立地と環境

長崎県のほぼ中央，佐賀県との県境をなす多良山系は，標高1076mの経ケ岳を最高峰とし，五家原岳，多良岳などの山々によって形成される死火山である。この山系を中心として，裾野はゆっくりと四方に広がり，北側は大野原と呼ばれる標高400mほどのゆるい台地となって佐賀県側に続いている。東は有明海，南は諫早湾に，そして西側は大村湾に面している。これら四方に伸びる裾野には，多くの峡谷が多良山系を中心として放射状に刻みこまれ，この峡谷を作った河川は，谷の出口に大小の扇状地を形成している。

彼杵(そのぎ)川は，多良山系の北西，佐賀県境をなす虚空蔵山系と大野原からの水流を合わせて南西方向に向い，谷の出口から南流している。

上杉古墳群，彼杵川古墳群は谷の出口付近の平地上にあり，ひさご塚古墳は扇状地の南端部に位置している。

多良山系の経ケ岳，多良岳，五家原岳にかこまれた大村市黒木は，多良火山の旧火口部といわれ，全長約19kmの郡(こおり)川は，この火口縁の西側を切ってV字谷を作り，谷を縫って西流し坂口付近で北西方に向きを変えて大村湾にそそいでいる。谷を離れる坂口を扇頂として，扇状地を形成している。

古墳はこの扇状地上と，この平地を見おろす周辺の丘陵上に集中している。

1．ひさご塚古墳
2．野田古墳
3．鬼の穴古墳

第1図　ひさご塚古墳・鬼の穴古墳・野田古墳位置図

3　ひさご塚古墳

本古墳は，「彼杵（そのき）の古墳」とも呼ばれており，東彼杵町宿郷字古金屋道上に所在する前方後円墳である。彼杵川によって形成された小扇状地の南端部に位置し，周辺は水田となっており，すぐ北側を国道205号線が通っている。

墳丘は，主軸をN—62°—Wに向け，南東から北西に伸びている。全長51.8m，後円部の直径29.5m，前方部の幅は7.1mを測る。高さは，後円部で6.2m，前方部で2.6mある。後円部の

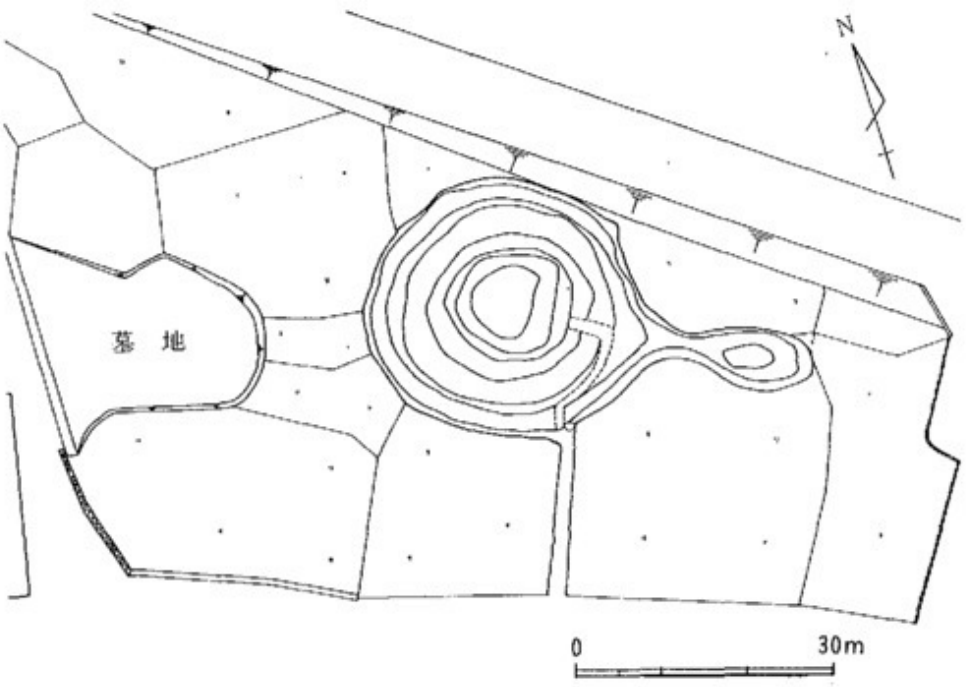
第2図　ひさご塚古墳位置図

大きさに比較して前方部がひどく小さく，高さも低い。もともとの前方部はもう少し幅が広く，長さもあったものと思われるが，永年の水田耕作などによって削り取られたものであろう。後円部の観察によれば，築成は二段になっており，３ｍ～3.4ｍの間から平らになり，その後さらに立ち上がっていたもののようである。しかし，前方部においては，このような痕跡は残っていない。

埴輪は認められていないが，葺石と思われる拳大から人頭大の石が部分的に残存する。周濠は残っておらず，周囲の水田の状況からもそれらしいものの存在は窺えない。

内部主体は不明であるが，後円部のほぼ中央に祭壇があり，その基壇部に扁平な安山岩の板石が使用されていることから，これらの板石を用いて埋葬主体部を構築していたものと考えられる。板石はそれほど大きくなく，数がかなりあるところから，箱式石棺よりも竪穴式石室であった可能性が強い。

本古墳については，二度にわたって主体部が開けられたという話しが残されている。最初は明治初期であり，次は国鉄大村線の開通した時だそうである。最初は明治10年頃に盗掘を受けた，という言い伝えのみが残っており，その内容については判然としない。その後，本古墳の北東側に，現在国鉄大村線となっている線路が，明治31年に完成したが，この工事中に再度，主体部が開けられたという。この時は，鉄刀二振り，さび付いて数量は正確にはわからなかった。



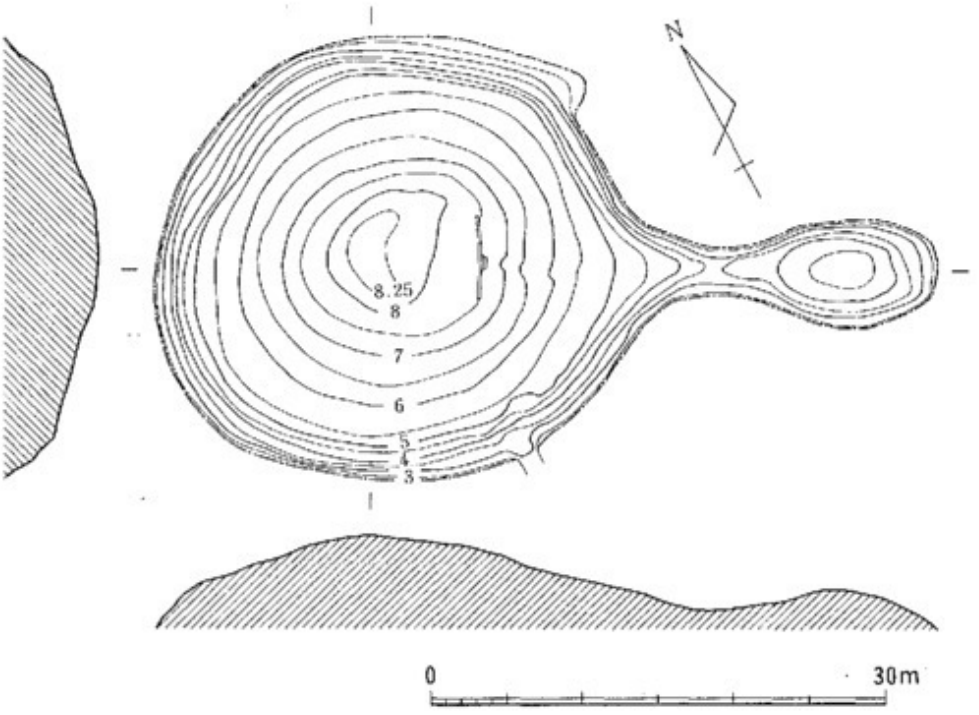
第３図　ひさご塚古墳　周辺地形図

たが多量の鉄鏃が出土したといわれている。この他にも，玉類の出土が伝えられているが，種類・数量ともに現在では不明である。なお，この時出土したものの一部は県内の学校に移されたと言われているが，どこに保管されているのか不明である。

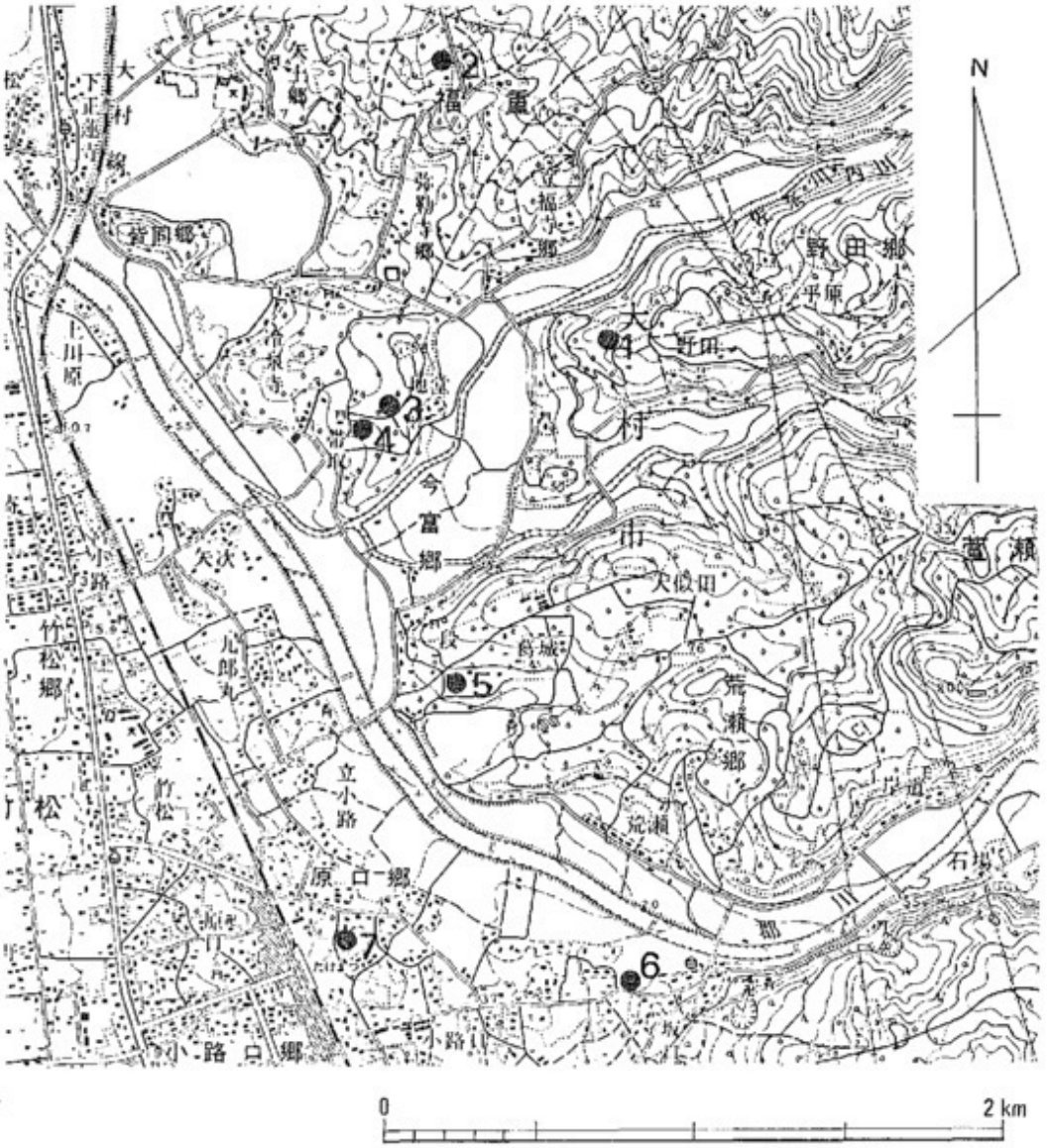
本古墳は，５世紀代のものと思われるが，県内の代表的な前方後円墳ということで，昭和25年４月10日，長崎県の指定史跡となっている。

本古墳のすぐ西側に，水田に囲まれて墓地がある。水田より１～２ｍ盛りあがり，上部はやや平坦になっているが，平面での形を見ると前方後円墳であったものと思われる。いくぶん変形しているが，全長25ｍ前後，後円部の直径15ｍほどらしいが，前方部の形はかなりいびつになっている。主軸は，ほぼ東西に向けている。

このほかに，時代的には降るが，彼杵川南岸の平地に横穴式石室を主体部とする古墳群がある。（第２図）　上杉古墳群と彼杵川古墳群である。これらの古墳群については，後日の調査に期待したい。



第４図　ひさご塚古墳　墳丘実測図



第5図　鬼の穴古墳・野田古墳位置図

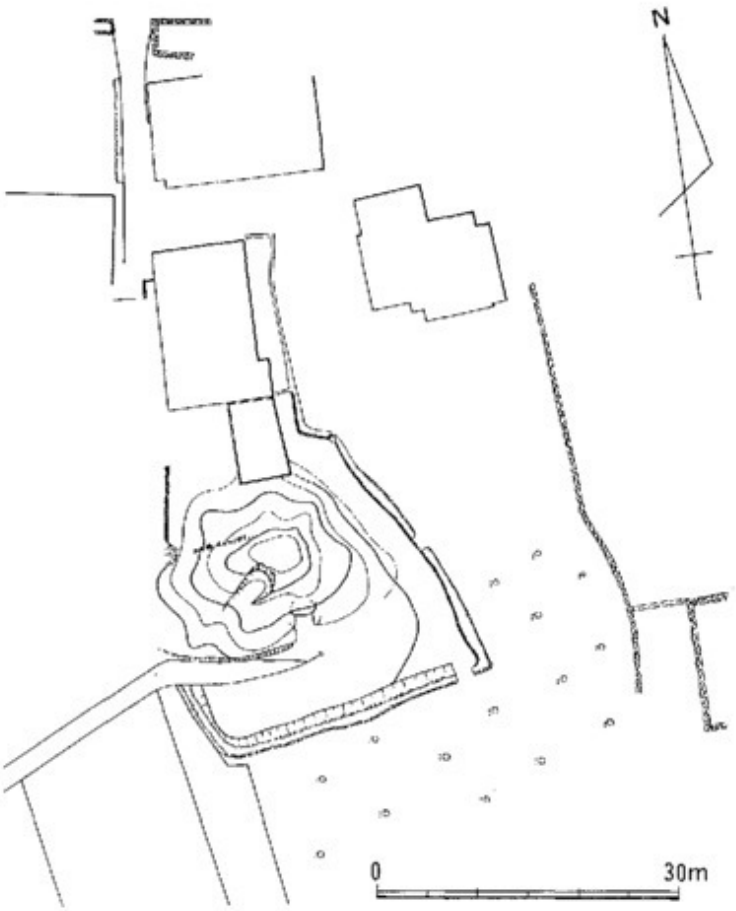
No.	遺跡名	所在地	概要
1	野田古墳	大村市野田郷（みかん畑）	本書に報告
2	弥勒寺古墳	〃　弥勒寺郷八竜（みかん畑）	墳丘なし。破壊がひどい。横穴式石室か
3	黄金山古墳	〃　今富郷小金山（山林）	高さ3mほどの墳丘。初期横穴式石室と箱式石棺との折衷形態
4	地蔵古墳	〃　今富郷地蔵（宅地）	墳丘なし。南に開口する横穴式石室
5	葛城古墳	〃　葛城郷（畑地）	墳丘なし。破壊がひどい。横穴式石室か
6	上小路口古墳	〃　小路口郷（みかん畑）	墳丘なし。天井石がない。南に開口する横穴式石室
7	鬼の穴古墳	〃　小路口郷（山林）	本書に報告

4　鬼の穴古墳

本古墳は，大村市小路口(おろぐち)郷192番地にあり，郡川(こおり)によって形成された扇状地の，標高28mほどのところに位置している。墳丘と，その南側に杉の木が植林してあり，周辺は畑地として使用されている。

この古墳は，かなり古くから開口しており，大村藩の郷村記中，竹松村の項に「一、鬼穴之事」として，「原口村下小路口郷」に，「古来より鬼の穴と申伝への穴あり」と記されている。このことから，少なくとも江戸末期には開口していたことがわかるが，開口に際しての記述はない。

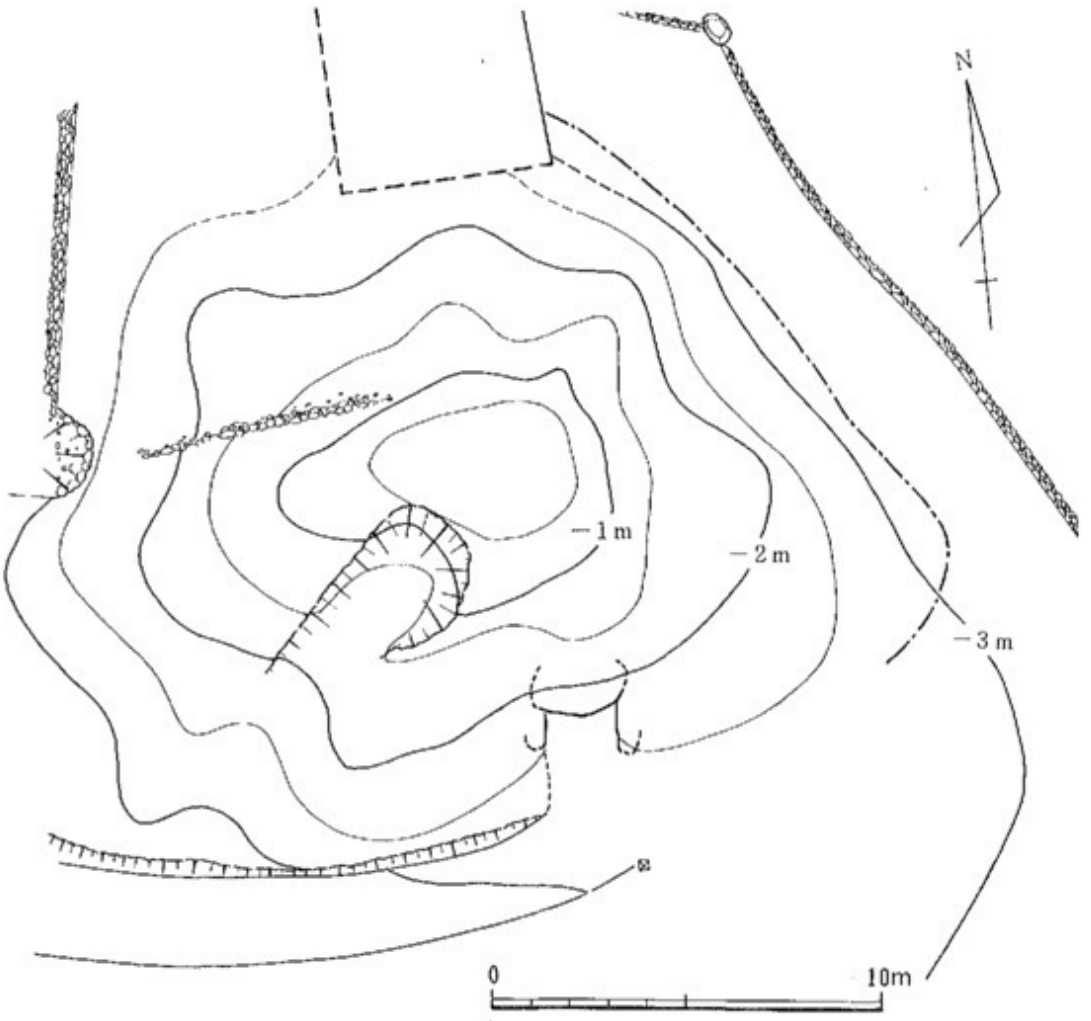
墳丘は，直径20mほどで，高さ約3mあり，円墳と思われる。表面はかなり不整形で，人頭大の礫が散乱している。これらの礫は，葬石というより，周囲に無数にある石を寄せたような



第6図　鬼の穴古墳周辺地形図

感じを受ける。

内部主体は，主軸をN—7°—Wに向け，南に開口する両袖式の複室横穴式石室である。玄室は，奥壁，側壁，天井とも巨大な石材で構築されている。奥壁は，高さ2.3m，幅2.9m以上の石材を使用し，西側壁も高さ2.3m，幅3.0m以上の石材を据えて腰石としている。これらの巨石上面の凹凸にあわせて小ぶりの石を横にして積み重ねている。奥壁と側壁の間には，いわゆる三角持ち送り状に石材を使用した部分も認められ，奥壁の上部は，玄室中央部に向けて石材を持ち送り，ドーム状にして天井石を架している。玄室の長さは，東側壁部で2.50m，西側壁部で3.15m，中央部で2.85m，幅は，奥壁部で2.60m，玄門部で2.85mある。床面が奥壁部でひどく掘り下げられて旧状を損っているため，正確な高さは不明であるが，2m前後はあったものと思われる。先述の郷村記によれば，「高サ五尺に方九尺位の間あり，天井は壱枚石」とあ



第7図　鬼の穴古墳　墳丘実測図

第８図　鬼の穴古墳　石室実測図

る。玄室の大きさはほぼ「方九尺」に近いことから考えると，当時は高さ「五尺」ほどであったものを，後に掘り下げたものと思われる。

玄門は両袖式で，東，西両側ともに高さ1.5m以上の石材を縦にして据えている。玄門部の幅は0.9m，高さ1.6mを測る。天井は前室から同じ高さで続き，特別に玄門を意識した痕跡はない。

前室も玄室と同様，大きい石を腰石として据え，その上に横にした石を順に積み上げて側壁としている。前室の長さは1.8mほどある。高さ1.5mあるが，本来の床面までは，まだ深くなるものと思われる。

前門も石材を縦にして使用しており，天井も前室より一段低く構え，門として意識的に構築している。

羨道は，入口側が壊れていて長さは不明である。あまり大きくない石材を，横にして積み上げ側壁としている。天井石が一枚残っているが，これは少し動いているように思われる。この天井石の最も外側から奥壁まで7.6mあり，天井石は5枚使用している。

閉塞の痕跡を残す部分，排水溝などの施設は観察されていない。壁面に対する彩色，線刻などの装飾的なものも認められない。

石室に使用されている石材は玄武岩系のものと思われる。

遺物については記録がなく，本墳出土と伝えられるものもないが，先年，羨道入口の南外側で須恵器の甕と思われる胴体の一部分が採集されている。

なお，本古墳の他にも，近辺に古墳があったものと思われ，先述の郷村記には，「此所より少し隔り畠中に鬼塚とて九尺方位の塚あり是も同じく大石を以て築立其辺の地名を鬼塚と云なり」と伝えられている。この記述によれば，鬼の穴古墳と同じく横穴式石室を持つ古墳であったことが知られる。

本古墳は，規模も大きく，大村市内で数少ない完存する古墳のひとつであるところから，昭和45年11月24日，大村市の史跡として指定を受けている。

最後に，この時の講習会では時間的な制約もあり，奥壁，東側壁とも部分的にしか実測できず，このため本稿では割愛せざるを得なかった。機会を見て完成させたく思っているので了承されたい。

5 野田古墳

本古墳は，大村市野田郷4332番地にあり，周囲はみかんを植えた段々畑となっている。多良山系から西に向いて伸びた山裾の，南側に面した標高80mほどの斜面に立地し，南の方に向いて開口する。本古墳のすぐ上に立てば，西の方1kmほどもなく樹木の茂った黄金山古墳があり，眼下には郡川，佐奈川内川の作った沖積平地が見渡せる。さらに大村湾とその向こうの西彼杵半島にも眺望がきく。

本古墳の発見はさほど古いことではない。土地所有者の記録によれば，「昭和37年3月」，「原野を開墾中」に発見されたということである。当時の状況を聞いたところ，みかん畑にするために，山林原野であったところに重機を入れたということであった。この際，この古墳に使用されているような石材の出たところがまだあったということであり，壊されたものもあったものと思われる。

遺物もここに図示しただけでなく，まだあったが，「昭和39年12月13日，九大教授其の他の調査団の鑑定」を受け，その日に「長崎博物館と大村市公民館に寄贈」されたとのことである。しかし，これらの他にもまだ野田古墳出土の須恵器があり，第10図4のように大村市内在住の人の所有になっているものもある。

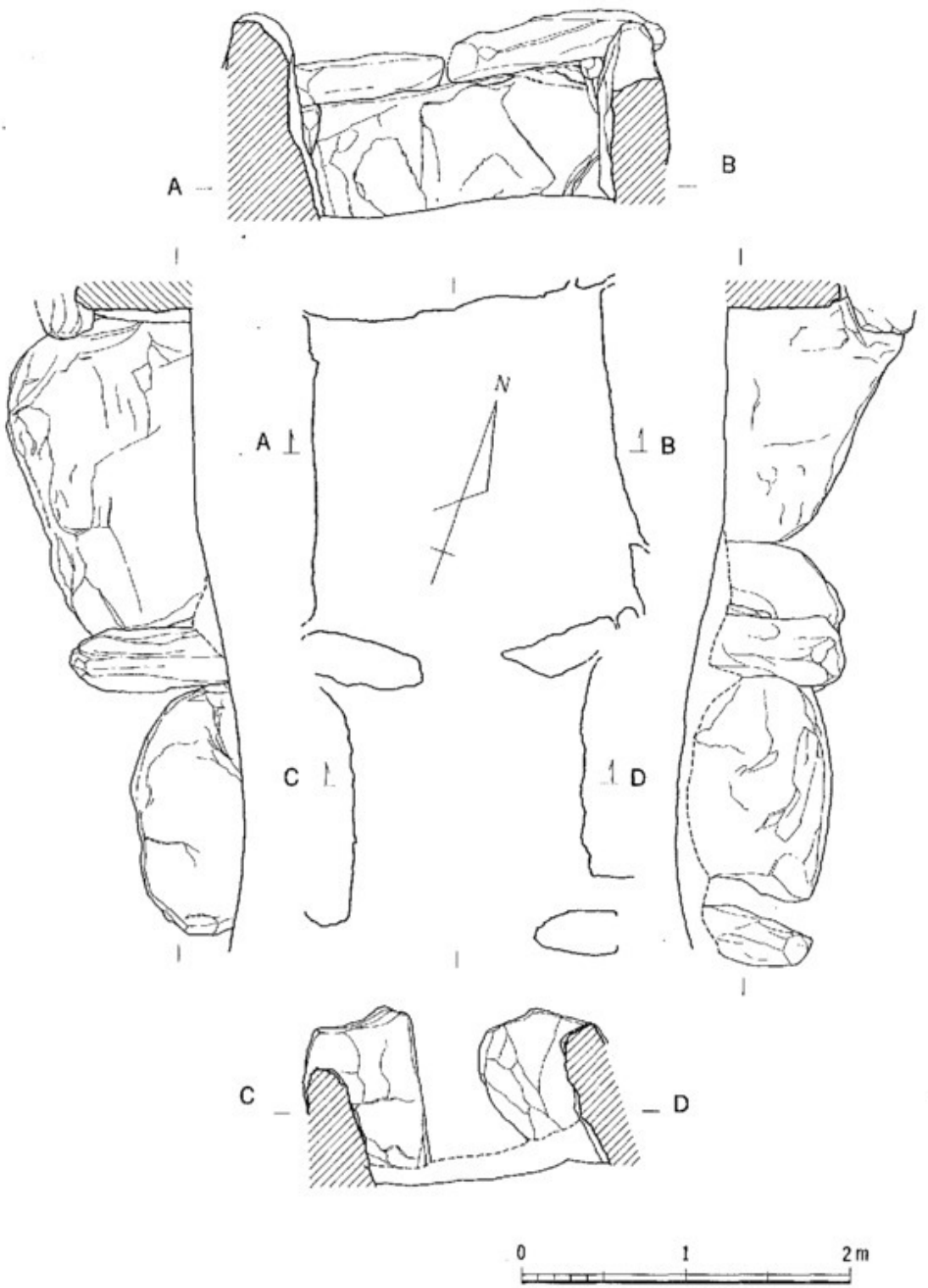
墳丘は現在全く残っていない。開墾時にはこんもりとした土盛りがあったと伝えられるが，どのくらいの規模かは記録がなく不明である。

内部主体は，主軸をN—18°—Wに向ける両袖式の横穴式石室である。玄室の長さは，東側壁部で2.0m，西側壁部で1.9m，中央部で2.1mあり，幅は，奥壁部で1.8m，玄門部で2.0mを測る。奥壁・東・西側壁ともに大き目の石を横位置にして立て据え，腰石としている。奥壁では，この上に2枚の石を横にして積み重ね，腰石との間に小さな石をかませている。ここまでには，いわゆる三角持送り状に使用した石材は認められず，奥壁上部の石が石室中央部に向けて送り出されており，ドーム状の天井を構築していたらしいことが窺える。

東側壁は2枚の平らな石を横位置に立てて腰石としているが，これより上部は全て欠失している。西側壁は長さ1.9m以上の石材を，やはり横位置に立てて腰石としているが，これも上部を失っている。

玄門部は，東側・西側ともに厚さ0.2～0.3mの石材を立て，いずれもわずかに羨道側に先端を開いた形をとり，西側に傾いている。玄門の間は約0.5mあり，両側の石材とも頂点をほぼ同じ高さにそろえているところから，この上に天井石を架した可能性もある。

羨道は東・西側とも1枚の石材を残し，上部は失っている。幅は1.4mほどで，玄門と同じく両側石とも西側に傾いている。東側壁では，この石の外側に，石材を立てて使用しているが，当初からのものかどうか若干の疑いが残る。石材の質は玄武岩である。

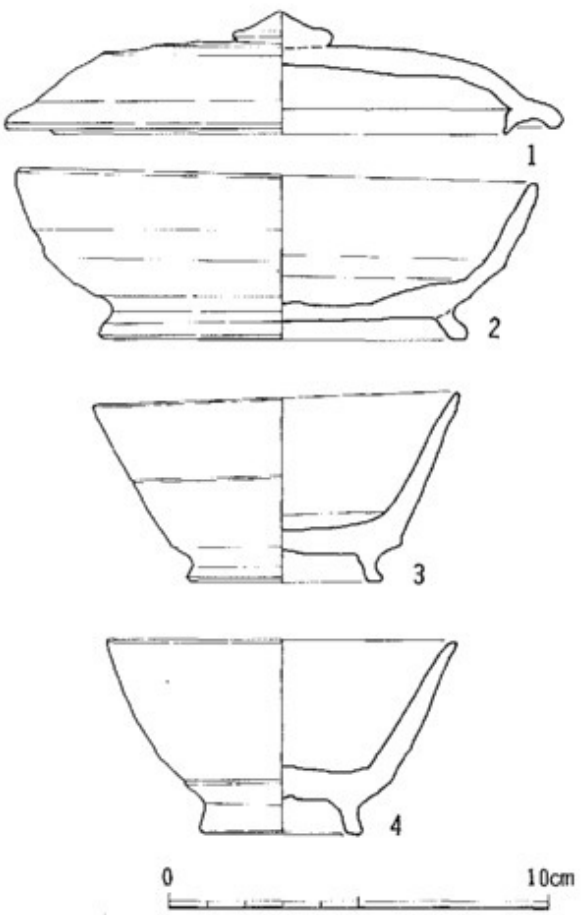


第9図　野田古墳　右室実測図

野田古墳出土の須恵器

坏蓋　（第10図１）直径14.6cmを計る。背の低い，大きなつまみを持つ。口縁端部は丸くおさめ，断面が三角形に近いかえりを付けている。天井部をヘラ削りしたあとでつまみを付け，ナデて仕上げている。天井部内面は横方向にナデている。胎土に若干砂粒を含むが，焼成は良い。灰色を呈する。

坏身　（第10図２・３・４）　2.　口縁径13.5cm，器高4.5cmの高台付きである。外上方にわずかに内湾しつつ伸びた体部に，端部を丸くおさめた口縁部が続く。高台径9.7cmで，外方に張り出す形に貼り付けられている。内面底部は横方向に近いナデ，外面底部は多方向へナデて仕上げている。胎土にはわずかに砂粒を含む。焼成は良く，全体的に灰色を呈する。１と対になるものと思われる。3.　口縁径9.5cm，器高4.9cm。ほぼ真直ぐに外上方に伸びる体部に，丸くおさめた口脣部が付く。直径5.2cmの高台は，２と同じく外方に張り出し気味に付けられており，貼り付け後，横ナデで調整している。色調は黒灰色で，一部に黄灰色の灰かぶりがある。胎土は良く，非常に良く焼き締まり，堅緻である。4.　３をやや細くしたような作りで，口縁径9.3cm，器高5.1cmを計る。外上方にほぼ真直ぐに伸びるやや厚めの体部に，丸くおさめた口脣部が付く。これも高台を貼り付け，そのあとをナデて仕上げている。高台の直径は4.3cm。全体的に灰色であるが，一部に黒っぽい自然釉がかかっている。胎土，焼成ともに良好である。



第10図　野田古墳出土須恵器実測図

唐比塔ノ本遺跡

——北高来郡森山町所在——

例　　言

1　本報告は，北高来郡森山町の主催で，長崎県教育庁文化課が実施した，刳舟出土地の調査報告である。

2　調査は，昭和49年4月5日から4月11日までの，7日間行った。

3　調査は，長崎県教育庁文化課の田川肇・藤田和裕が担当した。

4　本報告に使用の写真撮影は，田川・藤田による。

5　本報告の執筆・編集は藤田が行った。

最後になったが，本調査にあたっては，地主の山崎十次夫氏ほか地元唐比の皆様，森山町，森山町教育委員会，唐比温泉センターなど，多くの方々に御助力と御協力をいただいた。記して謝意を表したい。

本 文 目 次

頁

1　調査に至る経緯……68
2　立地と環境……69
3　調　査……70
(1)　土　層……70
(2)　出土状況……71
(3)　出土の刳舟……71
4　おわりに……72

挿 図 目 次

頁

第1図　刳舟出土地位置図……68
第2図　刳舟出土地周辺の地形……69
第3図　土層図……70
第4図　刳舟出土状況図……71

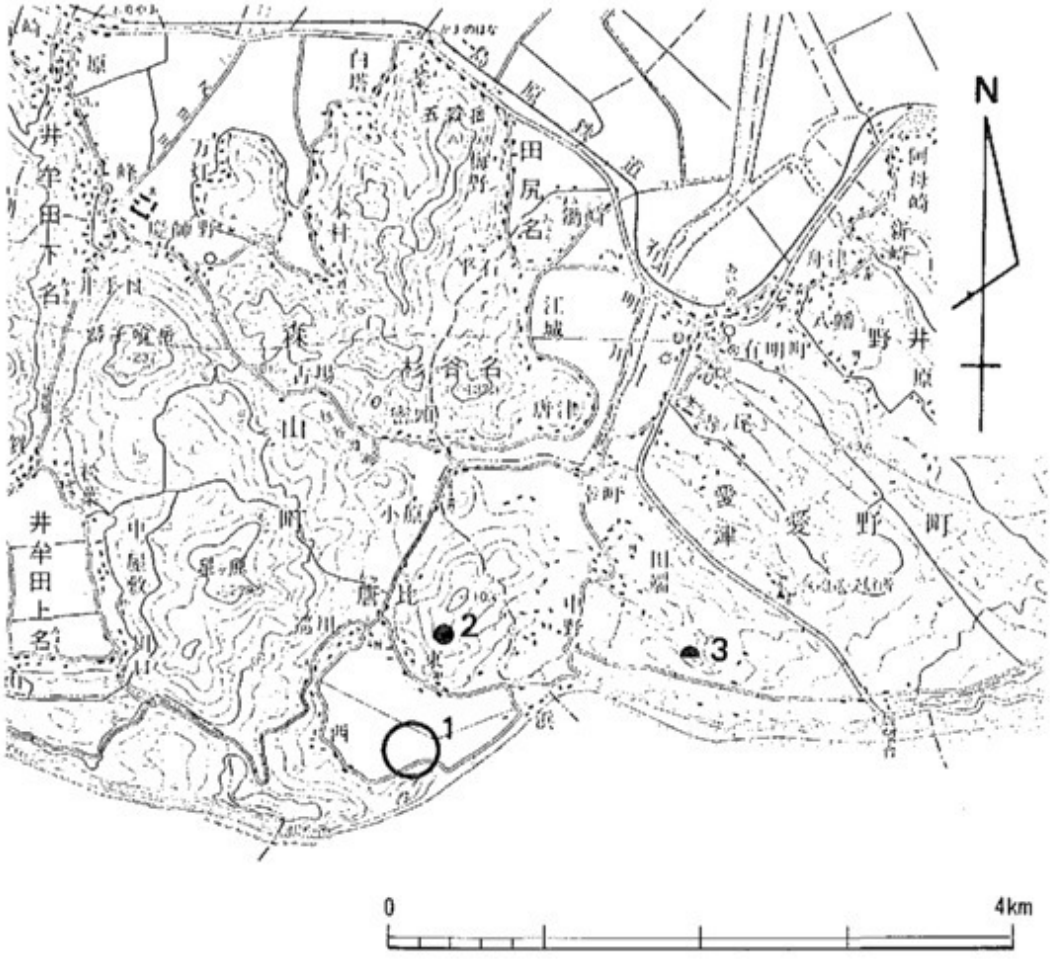
図 版 目 次

頁

図版15　刳舟出土地遠景……88
図版16　調査風景……89
図版17　刳舟出土状況……90
図版18　出土の刳舟……91
図版19　出土の刳舟と水槽への収容状況……92

1　調査に至る経緯

昭和49年１月18日，北高来郡森山町教育委員会から，県文化課に，「森山町唐比西名510番地の山崎十次夫氏が，同町唐比西名塔ノ本108－2番地の水田で排水溝工事のため水田を掘り下げていたところ，丸木の刳舟と思われるものが出土した」，との電話連絡があった。このため，文化課の職員がただちに現地に向い，状況の確認をした。そしてこの結果，水を張った状態で調査を待つことにし，また，森山町は，調査終了後にこの刳舟を水漬けの状態で保存できるよう，すぐ近くの唐比温泉センターの敷地内にコンクリートで水槽を作ることとなった。



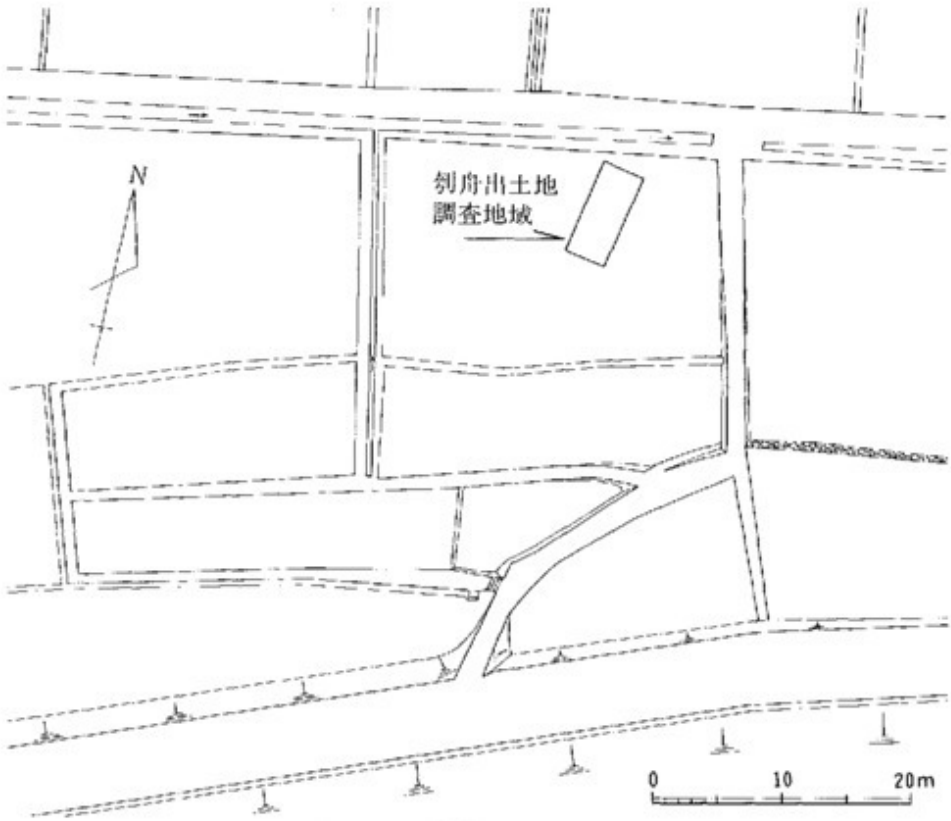
第１図　　刳舟出土地位置図

2　立地と環境

刳舟の出土した場所は，長崎半島と島原半島に囲まれた千々石湾（橘湾）の一番奥に位置し，島原半島を扼する狭隘な愛野地峡の南端にあたる。千々石湾の北岸は愛野断層と呼ばれる標高100ｍ前後の断崖となっており，この断層の切れた部分にあたり，千々石湾を巡る海流によって砂嘴が形成され，この後背地に東西約1.3km，南北0.8kmの低湿地が広がっている。この平地は，もともとが潟地で，これを水田にしたが深田であり，往時は胸まで没して田植えをしたとのことであるが，近年客土をしてからそれほどまではなくなったという。

刳舟は，この低湿地の東西のほぼ中央部，南側の山地との傾斜変換線よりやや低湿地側の，標高１ｍに満たない場所から出土した。（第１図１）

周辺には，唐比遺跡（第１図２，散布地），中島古墳（第１図３）があり，西の方，4.3 km ほど隔てて縄文中期から後期にかけての有喜貝塚がある。



第２図　　刳舟出土地周辺の地形

3 調　査

調査は，年度の変った昭和49年４月５日から４月11日までの７日間行った。水漬けになっていた刳舟の周辺を拡張し，遺構，遺物の検出につとめたが，全くそれらしいものを認めなかった。出土状況などの実測を行い，平板測量，写真撮影を終えてから取り上げ，温泉センターの水槽に移して調査を終了した。

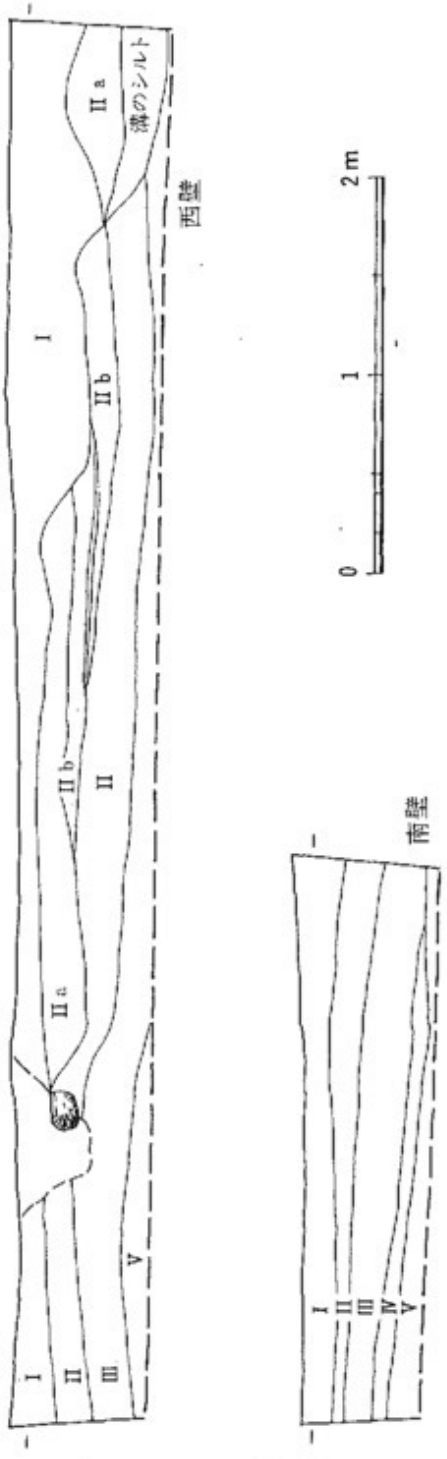
(1) 土　層

土層は，第Ⅰ層が耕作土で，Ⅱ層が灰色の有機質層である。Ⅱ層のａは黒色を呈し，ｂは黒褐色を呈するものである。Ⅲ層は淡い茶褐色の有機質層となっており，Ⅳ層は明るい灰色の有機質層となっているが，この層の有機物はさほど多くはない。Ⅴ層は黄色の泥炭状の層で，ひしの実などの有機物を含んでいる。

南壁での観察によると，Ⅱ層，Ⅲ層は西側に傾いているが，Ⅳ層は，西側に傾斜していたⅤ層が若干高くなっていて，そのため途中で消滅している。

西壁の土層図で，南側の落ち込みは排水溝である。また，ⅡｂとⅡｂにはさまれているのは，帯状の黒色土層である。

刳舟はⅡ層とⅢ層の有機質の層の中に出土した。



第３図　土　層　図

(2) 出土状況

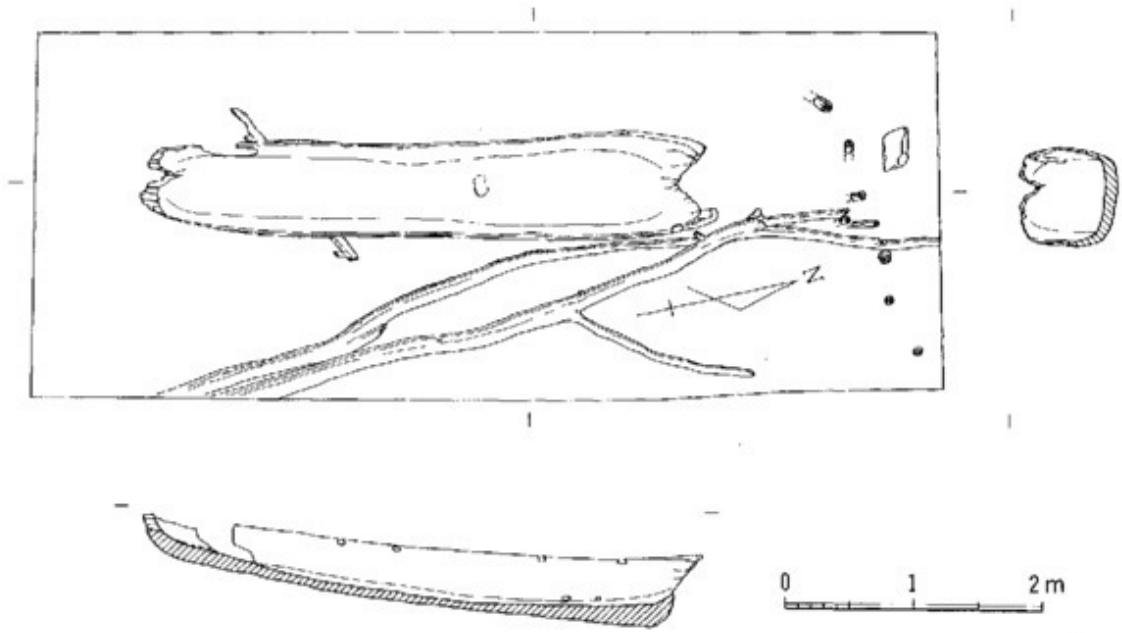
主軸をN－13°－Eに向け，北側に約6°の角度で傾いた状態で出土した。刳舟の北側の端部から1mほど北側に，西から南側に約8°ほど振れるほぼ一直線上に，丸太の杭列があり，この杭列の北側は旧水路となっている。刳舟のすぐ東側に，根元を南にしてほぼ南北に横たわる自然木が二本出土したが，これらは先端部になるにつれ深く埋もれている。また，刳舟の下には，東側を根元にした，直径10cm内外，長さ1.5mの自然木が横たわる。

以上のような出土状況からすれば，杭列以外には，人為的に配置したという感じは受けなかった。

(3) 出土の刳舟

両先端部を欠失している。残存部の全長446cm，最大幅83cm，北側先端より1.4m付近で，幅は外側で74cm，内側で70cm，同位置での深さは内側で38cm，外側で48cmあり，底部の厚さは10cmある。一木の巨木を刳り抜いて作ったもので，横断面は丸味の付いた「コ」の字形を呈している。西側の舟べり上部に，4箇所の，横方向に平らな楕円形状の穴があり，うち3箇所は上縁部と貫通している。東側にもこれと同様のものが2箇所あるが，これは2箇所とも上縁部と続いており，そのうち北側のものは人為的なものではなさそうである。また，底部に近い所に3箇所の穴があるのは，節目が抜けたように観察された。

舟の底部，舷側部の厚さは一定ではなく，舟べりの最上部が最も薄く，2cm前後であり，徐



第4図　刳舟出土状況図

徐に厚くなって底部は比較的厚く，最も薄い所でも5.5cm，厚い所は18cmある。両端部にゆくほど厚くなるが，木目に沿って割れやすいということを考慮して厚目に削り残した結果と思われる。

両端部の，平面的な丸味から復原すると，全長4.8mほどはあったものらしい。

この刳舟は，一部を欠いているが，かなりしっかりしており，移動の際には魚網を帯状にし底部から巻いて持ち上げたこともあり，形の崩れなどはなかった。

4　おわりに

今回の刳舟の出土が，発見と同時に刳舟と直感され，町教育委員会への連絡が直ちになされたことについて，次のような伝説がこの地に残されていたことも，大きな要因になったものと思われる。その伝説というのは，「肥前高来郡唐頃(からこ)村蓮池山補陀林寺水晶観世音略縁起」に見られる，「今を去ること千年以上も前の天慶年中，唐頃の領主波辺某に，虎御前という息女がいた。父母を失くしたが大層美しく育ち，館の隅の楠を大事に育てていた。天暦十年夏の頃，虎御前はこの楠を伐って舟とし，観音丸と名付けて池に浮べていたが，舟ともども没して救われなかった。その後500年ほどたった文亀三年，旱魃のため天下大いに窮し，この池に祭壇を祭って法要したところ，雨降りわたり，沈んでいた楠の舟が，水晶の観音と供に出現した」というものである。この話しを伝える補陀林寺水晶観世音は，刳舟の出土した地点の北約0.5 kmのところにある。

以上に伝えられた話しは，かつて，この地がまだ水田として使用されていなかった頃の，このような刳舟を使用していた状況を伝えるのかも知れず，また，こういう刳舟が時々出土したことから言い伝えられた，とも考えられる。また，過去において出土した舟の一部は，先述した水晶観音に置いてある。

しかしながら，今回出土した刳舟については，刳舟の中はもちろん，その周辺においても，製作，あるいは使用された時期を示す遺物は全く出土しておらず，年代は一切不明というほかはない。ただ，かつてこの近辺が沼沢であったころに使用されていた刳舟であろうことは，ほぼ間違いないものと思われる。

図　　版

ひさご塚古墳（南側から）

ひさご塚古墳（西側から）

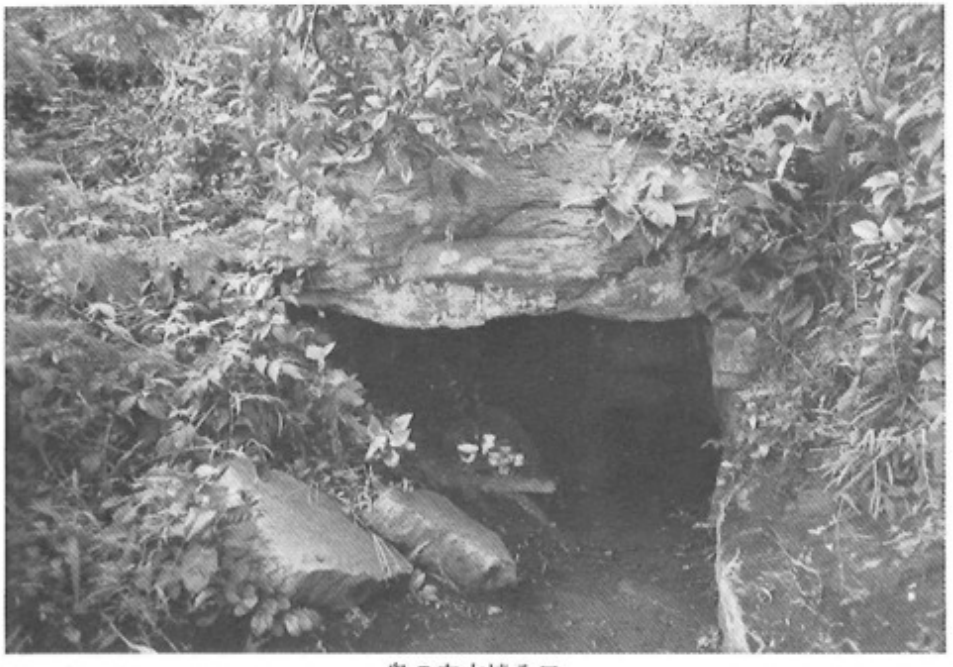
ひさご塚古墳（左隅に石室のものらしい石材がある）

上杉古墳群遠景

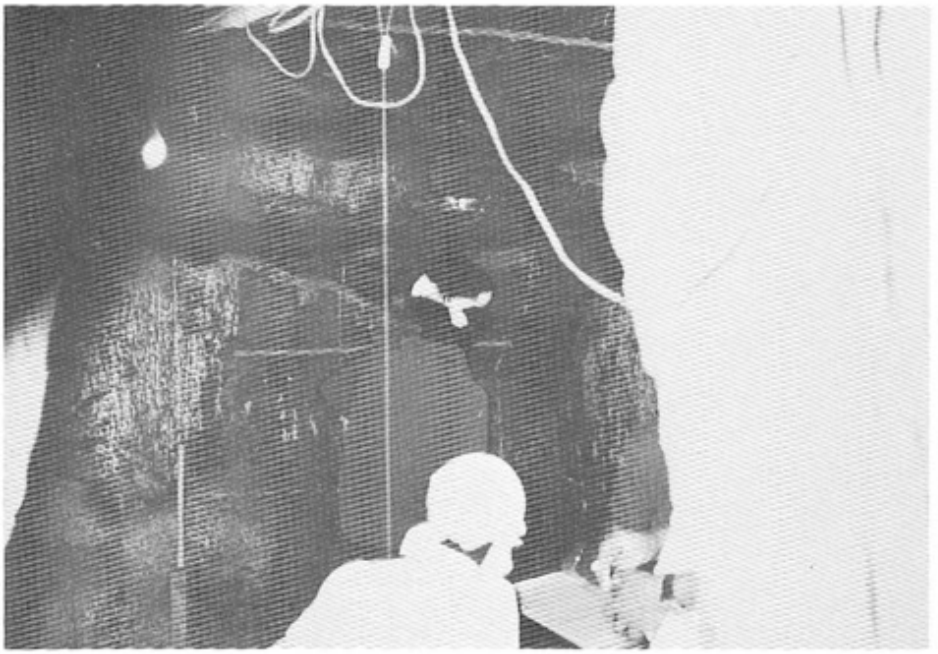
ひさご塚古墳調査風景

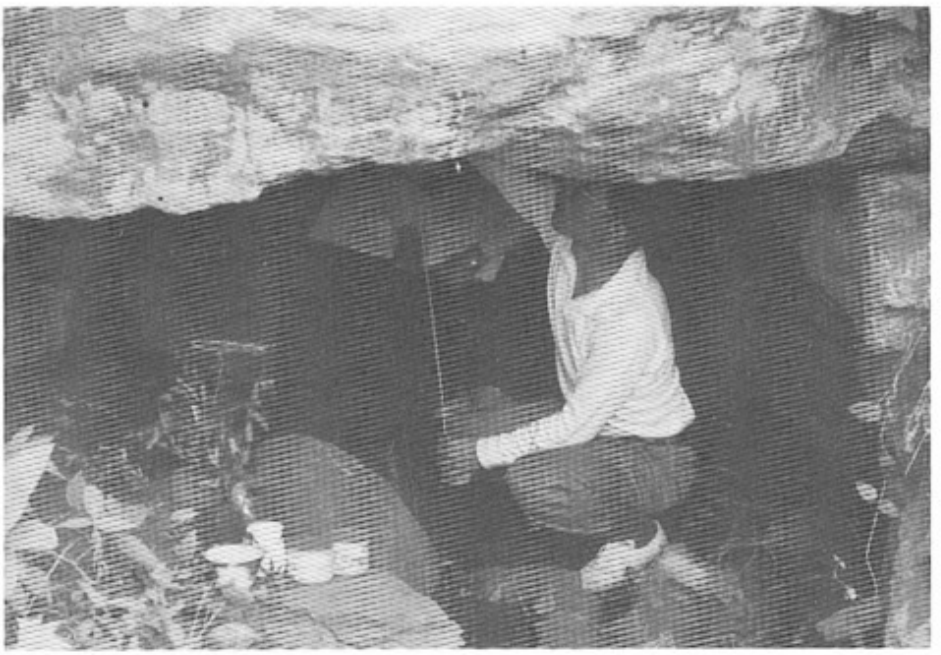
図版4

鬼の穴古墳（西から）

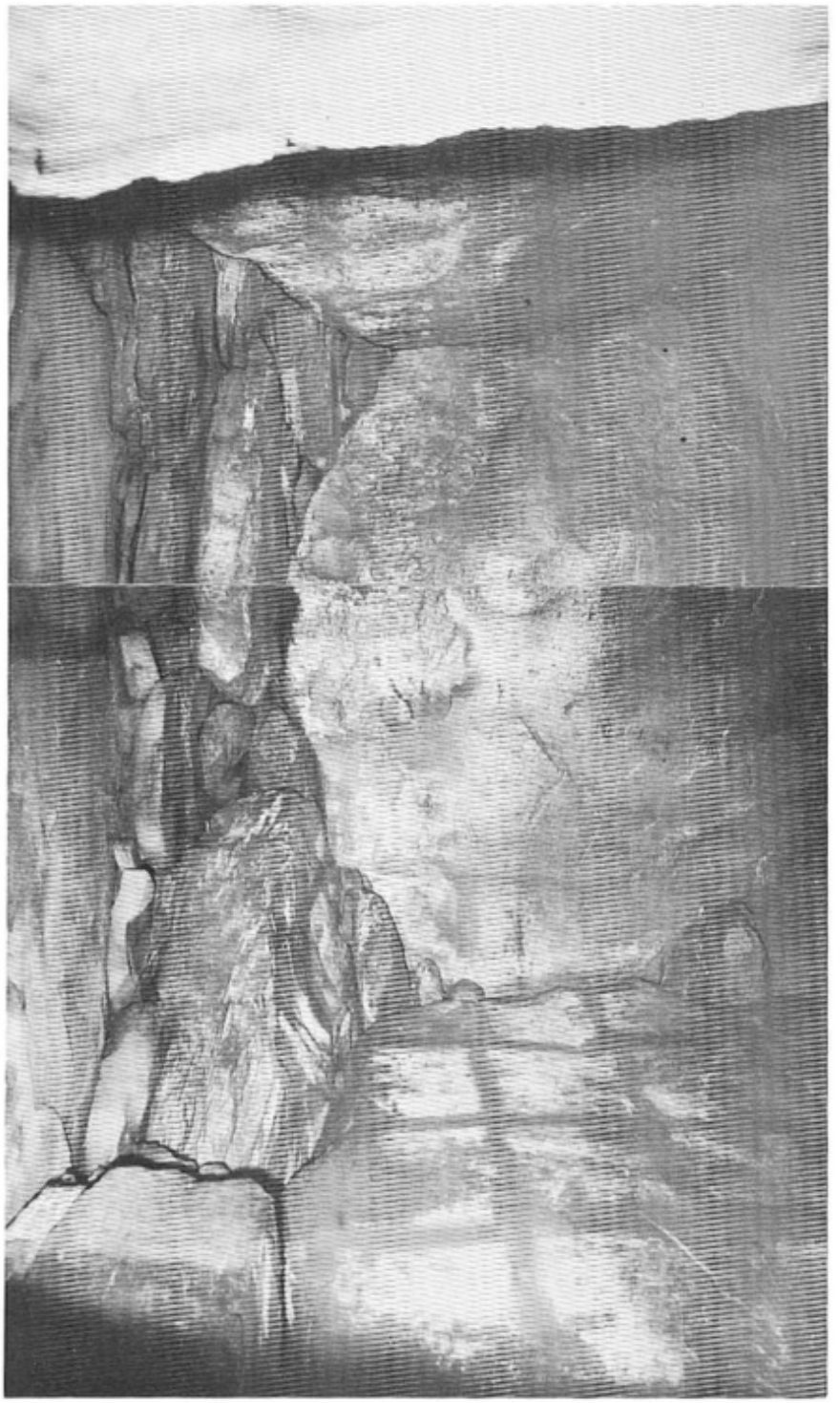


鬼の穴古墳入口





鬼の穴古墳調査風景



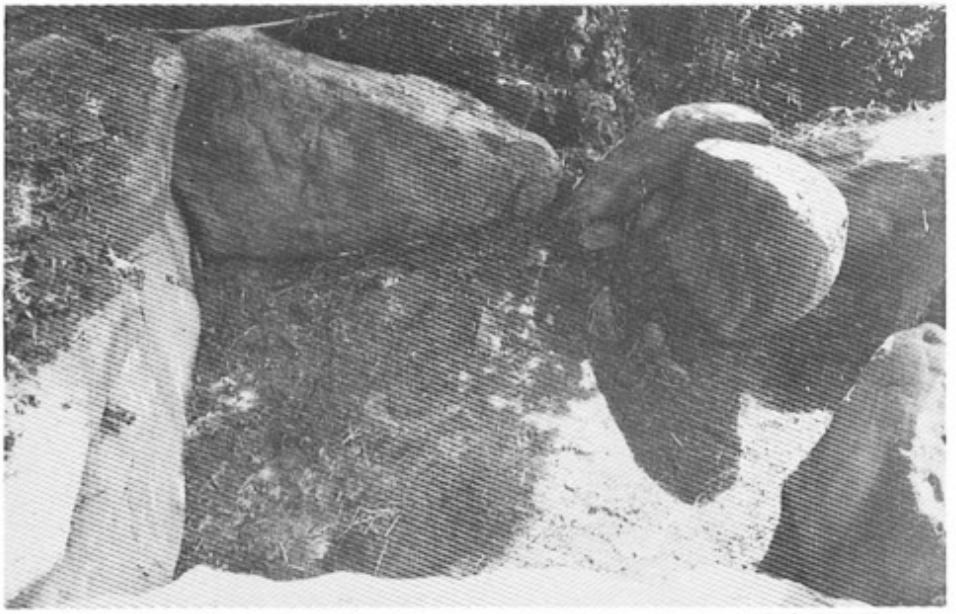
鬼の穴古墳　石室（奥壁）

野田古墳遠景（西から）
（中央ビニールハウスの左上）

野田古墳から黄金山古墳を望む。
（左端のこんもりした木立ちの部分が黄金山古墳）

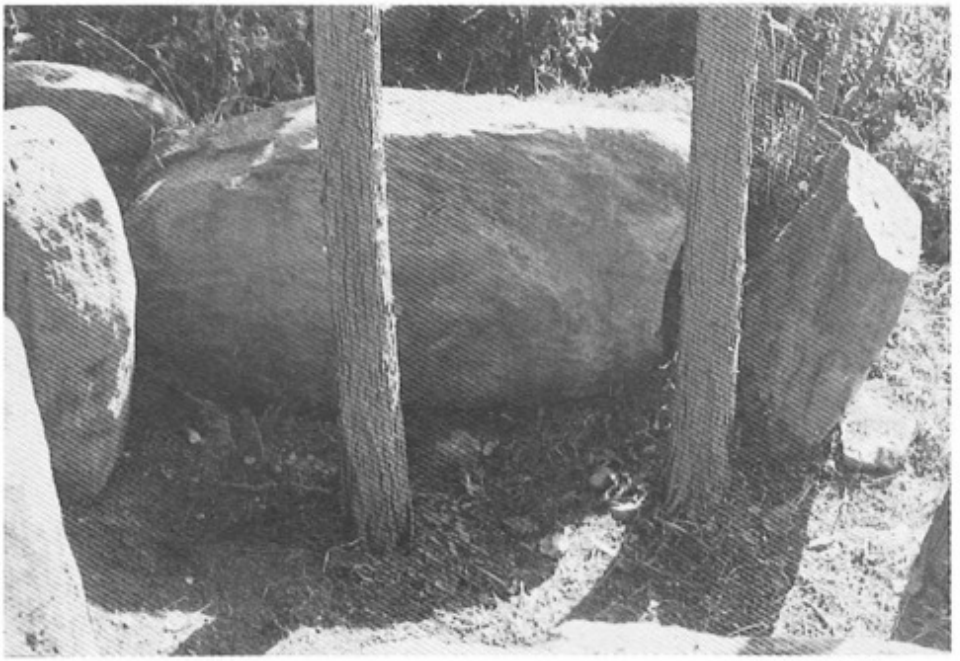
野田古墳　調査風景

奥壁



玄室東側壁

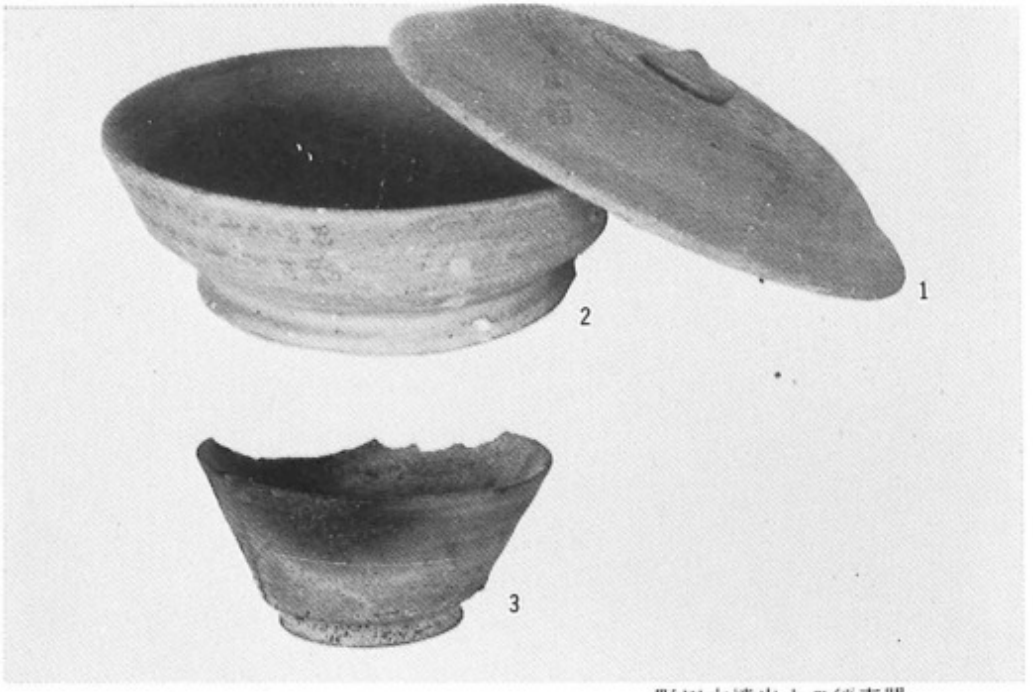
野田古墳　石室(1)



羨道東側壁

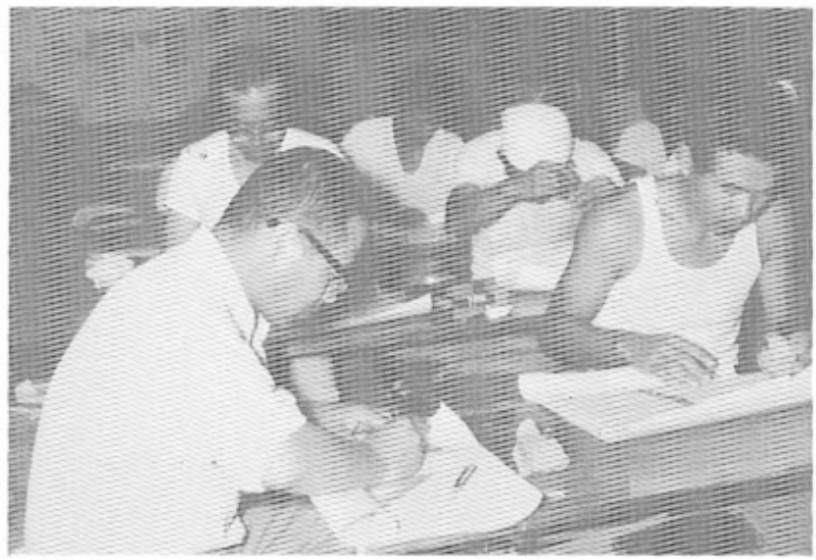
奥壁より玄門を見る

野田古墳　石室(2)

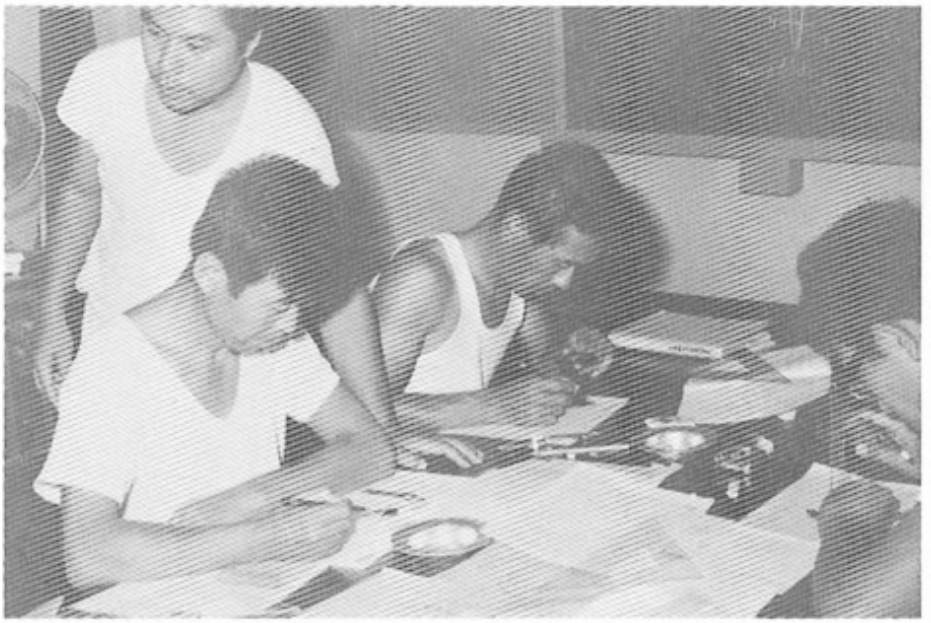


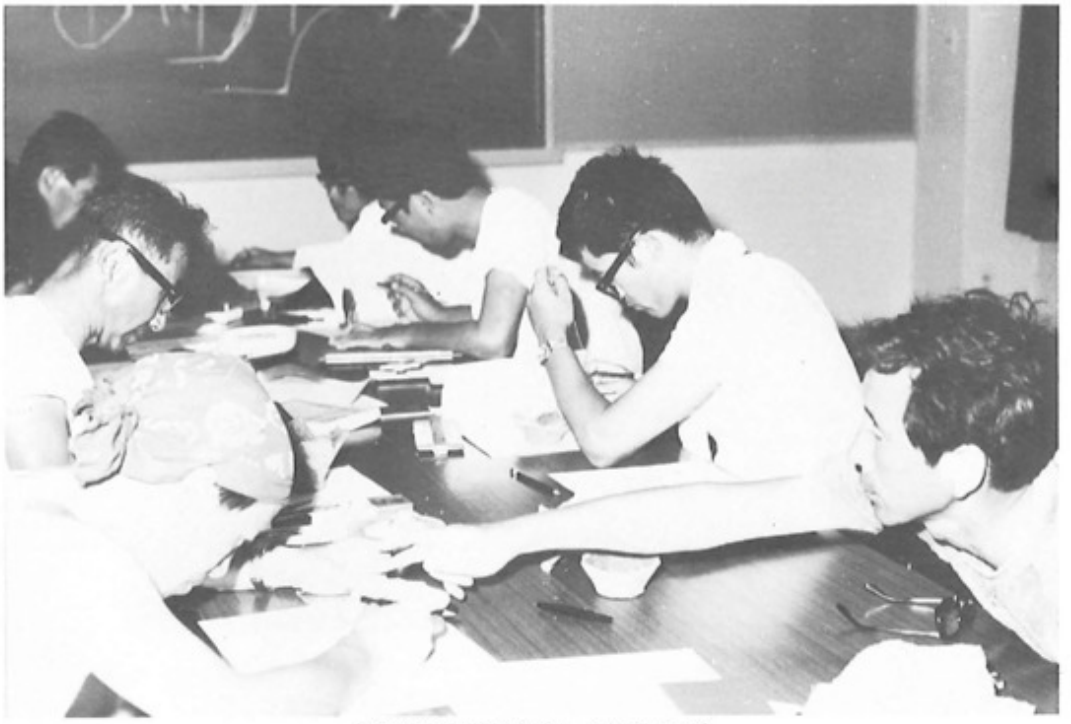
野田古墳出土の須恵器
（番号は第10図の番号に一致する）

野田古墳（羨道より奥壁を見る・昭和55年３月）



講習会実測実習風景（昭和49年）





講習会実測実習風景（昭和50年）

図版14

昭和49年
鬼の穴古墳にて

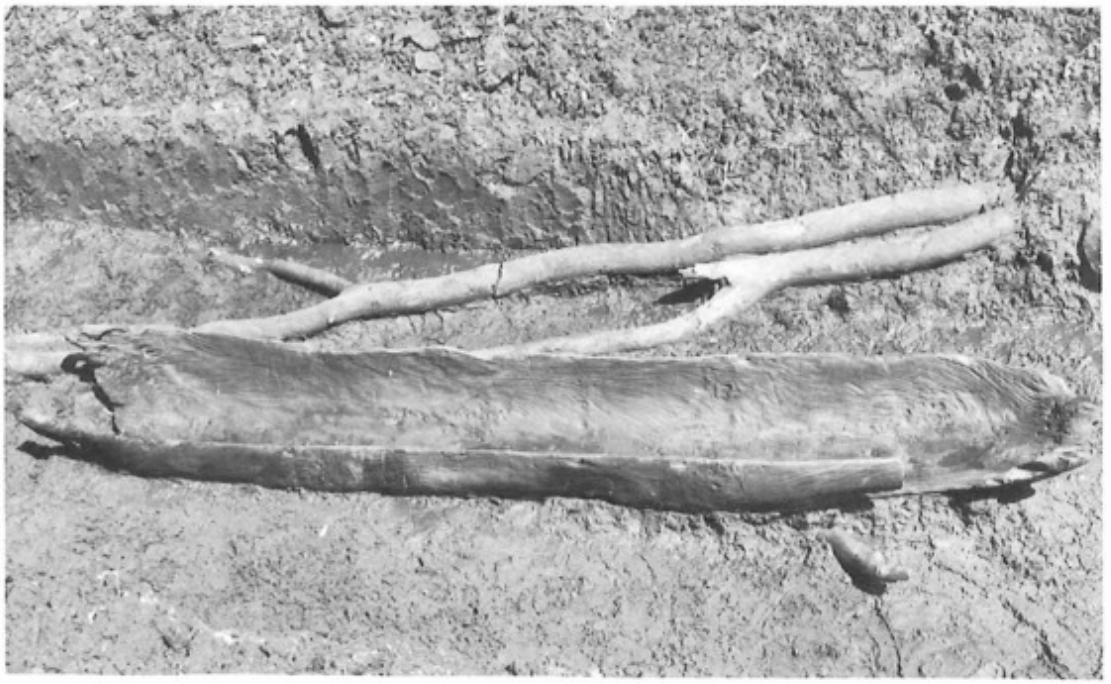
昭和50年
野田古墳にて

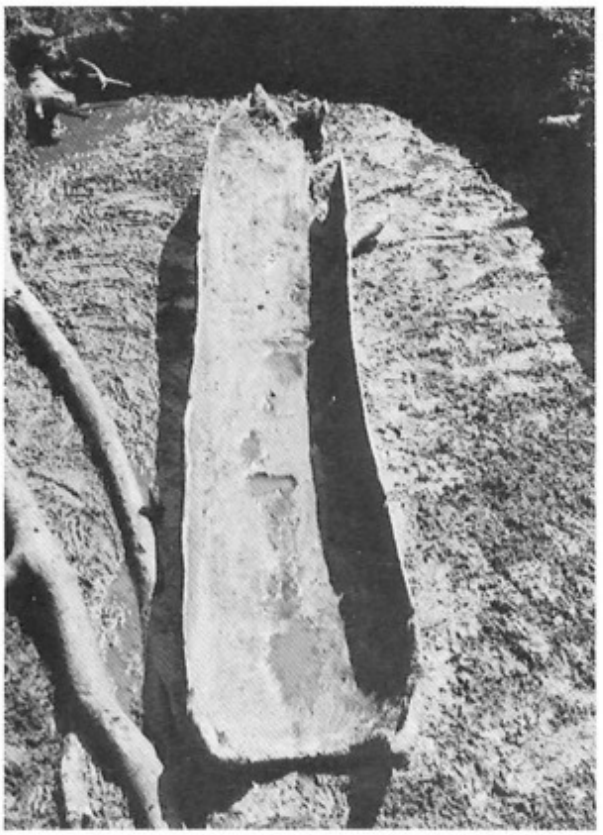
昭和51年
東彼杵町
農民研修
センターにて

講習会参加者および協力者

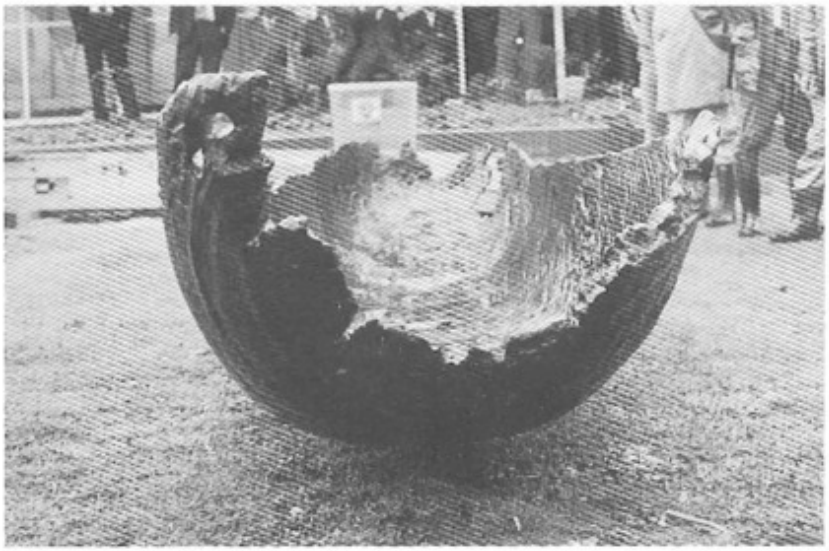
刳舟出土地遠景
（図のほぼ中央，後方は雲仙岳）

調 査 風 景





刳舟出土状況



出土の刳舟

調査関係者

出土の刳舟と水槽への収容状況

長崎県埋蔵文化財調査集報III

昭和55年３月31日

発行　長崎県教育委員会

長崎市江戸町２－13

印刷　三谷堂印刷所

長崎市幸町４－28